

# 名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.175

2007年12月

タイ王国のチュラポン王女殿下が本学を視察



## 目次

●ニュース	
タイ王国のチュラポーン王女殿下が本学を視察	3
第5回国際学術コンソーシアム（AC21）運営委員会を開催	4
AC21国際シンポジウム「高等教育における質保証と評価」を開催	4
平野総長が第5回日中長会議に出席	5
大学知的財産戦略研修会「大学における国際産学官連携について」を開催	6
第1回日中環境シンポジウムを開催	7
AC21学生ミニフォーラム2007を開催	7
本学が International Forum of Public Universities に加盟	8
平成19年度名古屋大学大学院秋季入学式を挙げる	9
平成19年度名古屋大学新入留学生歓迎懇談会を開催	9
石原一彰工学研究科教授が第21回「日本 IBM 科学賞」を受賞	10
日本数学コンクール表彰式を挙げる	10
フランス・ストラスブール大学コーラス隊と本学の混声合唱団及び	11
コール・グランツェとのジョイント・コンサートを開催	
平成19年度名古屋大学職員創作美術展を開催	11
平成19年度名古屋大学新規採用職員フォローアップ研修を開催	11
平成19年秋の叙勲受賞者決まる	12
平成19年度愛知地区国立大学法人等退職準備セミナーを開催	12
●知の未来へ	
がんと神経疾患の病理解明を求めて	13
榎本 篤（高等研究院特任講師）	
●知の先端	
情報通信分野における競争の法と政策	14
林 秀弥（大学院法学研究科准教授／高等研究院教員）	
●学生の元気	
インドネシアでインターンシップ	16
松本 治香（大学院国際開発研究科国際開発専攻博士課程前期課程2年）	
平成19年度愛知県国際交流推進功労者表彰を受章して	17
山田 みの理（大学院国際開発研究科国際開発専攻博士課程前期課程2年）	
●キャンパススクローズアップ	
豊田講堂（第2回）	18
●部局ニュース	
文学部創立60周年記念学術講演会・学術シンポジウム及び記念式典を挙げる	20
第8回オープンフォーラム「大学と国際協力機関との組織連携の強化	21
—大学国際化戦略の一環として—」を開催	
「ナノカーボン」サイエンスカフェを開催	22
リヨン高等師範学校関係者が理学研究科を訪問、部局間交流協定を締結	22
「学生との懇談会」を開催	23
日仏二国間セミナー「グローバル化で変化する日仏の国家アイデンティティ、	23
ジェンダー関係、社会格差」を開催	
地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」第4回講演会を開催	24
地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」	24
農業ふれあい教室「親子農業体験」を開催	
第4回東海地区 CSI 事業報告会を開催	24
農学国際教育協力研究センターが第7回～第9回オープンセミナーを開催	25
地球教室「河原の石で包丁を作ろう」を開催	26
秋の野外実習「ドングリからさぐる 古代の知恵・自然の知恵」を開催	26
「アジア憲法フォーラム2007」を開催	27
文部科学省特別教育研究経費 物質合成研究拠点機関連携事業	27
第2回若手フォーラムを開催	
●環境への取り組み	
ごみ減量化の取り組みについて	28
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成19年10月16日～11月15日	29
●イベントカレンダー	33
●ちょっと名大史	
自校史教育 一名大の歴史をたどる	36

# タイ王国のチュラポーン王女殿下が本学を視察





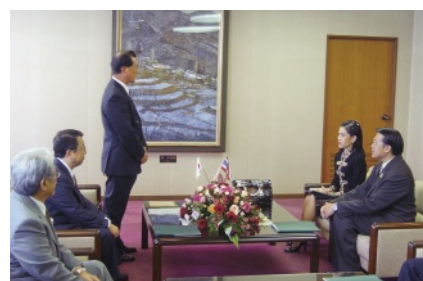
タイ王国のチュラポーン王女殿下が、10月17日(水)、18日(木)の両日、本学を訪問し、学内施設等を視察しました。

チュラポーン王女殿下は、「天然物化学」の研究で博士の学位を取得しており、研究者としても知られ、タイ国内ではチュラポーン財団を運営、同財団により、チュラポーン研究所、チュラポーン大学院大学、チュラポーン癌センターが設置されています。この度、本学と上記3機関との間で大学間交流協定を締結することとなり、今回の視察が実現しました。

17日午後、王女殿下は、東山キャンパスに到着し、本部1号館4階の総長応接室において、平野総長と懇談、記念品の交換を行いました。その後、かねてより研究を通して交流のあ

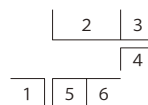
る磯部 稔生命農学研究科教授(高等研究院教員)の研究室を見学、同教授から研究概要説明を受けた後、赤崎記念研究館に移動しました。同研究館では赤崎 勇特別教授の出迎えを受け、澤木工学研究科前研究科長から青色発光ダイオードの研究開発史等の説明がありました。次いで、野依記念物質科学研究館を視察、野依良治特別教授のノーベル化学賞受賞関連の展示品について巽 物質科学国際研究センター長から説明を受けた後、タイからの研究者・留学生一同より王女殿下へ花束が贈呈されました。

翌18日には、鶴舞キャンパスにおいて、祖父江医学系研究科副研究科長から「神経疾患・腫瘍の統合分子医学の拠点形成(21世紀COEプログラム)」、高橋同副研究科長から「発癌と形態形



成に関わるヒト癌遺伝子の役割」に関する概要説明を受けた後、吉田 純同研究科教授(遺伝子・再生医療センター長)の案内により遺伝子・再生医療センターを視察しました。

王女殿下は、これら全ての研究概要・成果に関する説明を非常に興味深くお聞きになられ、大変、お喜びのご様子でした。



- 1 記念撮影
- 2 平野総長からチュラポーン王女殿下に記念品を贈呈
- 3 赤崎記念研究館にて
- 4 平野総長から歓迎の挨拶
- 5 磯部教授の研究室にて
- 6 野依記念物質科学研究館にて

## 第5回国際学術コンソーシアム（AC21）運営委員会を開催

第5回国際学術コンソーシアム（AC21）運営委員会が、10月25日（木）、26日（金）の両日、環境総合館レクチャーホールにおいて開催されました。

同運営委員会は、AC21が2002年に創設されて以来、毎年1回行われているもので、同運営委員会メンバーから、シドニー大学ジョン・ハーン副学長、ウォリック大学デビッド・ロー国際ディレクター、ケムニッツ工科大学エーベルハルト・アレス副学長、ノースカロライナ州立大学ラリー・ニールセン副学長、上海交通大学葉取源副学長、本学山本副総長（議長）及びAC21推進室員らが参加し、さらにAC21参加大学の吉林大学趙継副学長がオブザーバー参加しました。



挨拶する平野総長



AC21運営委員会の様子

平野総長の挨拶に続いて、運営委員会は、2年に1回の国際フォーラム及び学生世界フォーラムの定着をはじめとするAC21の5年間の活動成果を確認するとともに、今後の運営や活動計画について活発で実りある議論を行いました。また、9月にシドニー大学において設立された、コンソーシアム内の大学連携・共同研究を推進する基金が紹介されるなど、参加者から積極的な協力が表明されました。さらに、2008年7月27日から30日にノースカロライナ州立大学で開催する第4回AC21国際フォーラム「大学間パートナーシップ-21世紀のためのグローバルな提携と革新」の開催内容を確認するとともに、2009年学生世界フォーラムの開催地としてケムニッツ工科大学、2010年国際フォーラムの開催地として上海交通大学が立候補し、承認されました。

今回の議論を受けて、①新メンバーとメンバー資格、②パートナー（企業・地域団体等）との協力、に関する各ワーキング・グループの設立が提案され、集中的な議論を進めるほか、さらに魅力的な活動について今後検討し、来年のAC21総会で、新たな活動計画が提案・承認される予定です。

## AC21国際シンポジウム「高等教育における質保証と評価」を開催

10月26日（金）午後、環境総合館レクチャーホールにおいて、高等教育の質と評価に関する国際シンポジウムを開催しました。同シンポジウムには、AC21運営委員会参加者及びAC21推進室員に加えて、学内外から多くの参加者が出席しました。

このシンポジウムは、大学の国際化論や国際高等教育論分野において先駆的な研究者であるハンス・デ・ヴィット博士（ウインデスハイム・オナーズ・カレッジ）による講演「グローバル市場とネットワークの中の大学：大学の質向上のための大学間国際連携の役割」から始まりました。

講演では、学術面及び実践面から、高等教育機関による国際連携の意義と歴史的経緯についての紹介がありました。特に、コンソーシアムの意義として、大学をとりまく国際情勢を世界的な文脈から理解するための情報交換の機会を創出できること、限られた研究教育資源を共有し、有効活用することで個々の大学の機能を高めることができること、国際的な集合体として世界に情報発信することで個々の大学の世界における存在感を高めることができること、が指摘されました。

ラウンドテーブルでは、AC21運営委員のジョン・ハーンシドニー大学副学長、ラリー・ニールセンノースカロライナ州立大学副学長、デビッド・ローウォリック大学国際ディレクターから、ケース紹介があり、それに基づいて参加者全体での活発な議論がなされました。高等教育分野においてますます激しくなる国際競争にいかに対応するのか、今後もAC21の枠組みを利用した有益な議論の展開が期待されます。



ハンス・デ・ヴィット博士の基調講演



ラウンドテーブル・ディスカッション

## 平野総長が第5回日中学長会議に出席



日中学長会議で発表する平野総長

第5回日中学長会議が、東京大学の主催（共催：日本学術振興会）により11月7日（水）から9日（金）まで都内のホテルで開催され、本学から平野総長が出席しました。

今回が5回目となる同会議では、議題を「日中大学交流の深化を目指した共通戦略づくり」と設定し、日中大学間の実質的な交流や協力を進めていくに当たっての課題や今後の展望等について議論を行いました。会議の冒頭、保坂 武文部科学省政務官、章 新勝中国教育部副部长、小野元之日本学術振興会理事長による挨拶があった後、参加した日中各大学の学長・副学長から「日中大学連携による大学院レベルの人材育成」、「日中学長間の共通カリキュラム、学位相互認定システム」、「今後の日中大学間の協力及び日中学長会議」、「日中の学術交流・学生交流の促進」等についての発表があり、それぞれのテーマに基づいて議

論が行われました。平野総長からは、「研究者・学生交流の課題と展望」について、我が国と主要国及び中国との研究者・学生交流の実績と傾向に関するデータを示しながら、学術交流協定の実質化、研究者交流の活発化と負担軽減、留学生の質の向上、外国人研究者・留学生の受入環境の整備といった課題を提示するとともに、AC21の活動や独自の奨学制度（名大奨励賞、海外派遣研修）の創設など本学の取組みについて紹介し、大きな関心を引き寄せました。

会議の最後に、日中学長会議でこれまで提案された課題を解決し、具体的に実施していくために日中双方の実務レベルによるワーキング・グループを設置し、議論した上で、次回（第6回）会議で報告すること、次回は南開大学（中国・天津市）で開催することなどが決定されました。



会議の様子

# 大学知的財産戦略研修会 「大学における国際産学官連携について」を開催



挨拶する宮田副総長



基調講演を行う吉田文部科学省技術移転推進室室長補佐

大学知的財産戦略研修会が、11月15日(木)、野依記念学術交流館において開催されました。

同研修会は、産学官連携を今後効果的に進めるためには国際的な戦略を持つ必要があることから、「大学における国際産学官連携について」をテーマとし、文部科学省が進める大学知的財産本部整備事業の一環として、文部科学省と本学の共催により、主に中部地区の大学、高等専門学校、TLO、公設研究機関等の関係者を対象として開催されました。

はじめに、宮田副総長からの主催者あいさつがあった後、吉田秀保文部科学省研究振興局研究環境・産業連携課技術移転推進室室長補佐から「産学官連携の現状と今後の施策について～産学官連携の戦略的な展開に向けて～」と題して基調講演が行われました。

その後、本学が今後の国際的な産学連携を推進するうえで拠点となる米国ノースカロライナ州での産学官連携の状況について、柴田純男ノースカロライナ州政府日本事務所代表の講演がありました。ノースカロライナ州はビジネス環境で全米ナンバーワンに選ばれており、中部地区からも多数の企業が進出していることや、活発な産学官連携の具



講演する柴田ノースカロライナ州政府日本事務所代表



講演するシャム・プラカシュ ウォリック大学ベンチャー TTO ビジネス推進マネージャー

体例などが紹介されました。

さらに、欧州における事例紹介として、英国ウォリック大学のシャム・プラカシュ ウォリック・ベンチャー TTO ビジネス推進マネージャーの講演があり、大学発ベンチャーの起業化について、大学のベンチャー企業株式取得を総株式の25%以下にして経営への関与を低くする一方、大学への収益は最大限に確保する工夫や、公的資金を活用すること、ネットワークを広げることが重要であることなどの話がありました。

また、奈良先端科学技術大学院大学、信州大学、岐阜大学、名古屋工業大学および本学の知的財産関係組織の担当者から、国際産学官連携活動の事例紹介や調査報告が行われました。

同研修会には、約140名の参加があり、各大学等における国際産学官連携への関心の高さが伺われました。本学は、今後とも、特色ある拠点方式を中心にして、さらなる国際的な産学官連携活動を展開していきます。



会場の様子

## 第1回日中環境シンポジウムを開催

第1回日中環境シンポジウムが、11月15日(木)、環境総合館レクチャーホールにおいて開催されました。

このシンポジウムは、本学と上海交通大学との間で開催する「日中環境研究交流会」の一環として企画されたものです。同研究交流会は、環境研究において、互いに共通し、かつアジアや世界に対してアピールできるテーマについて、幅広い視点から連携した共同研究を企画・推進し、その成果による国際的な貢献を目指すことを目的としています。第1回の今回は「水と環境」を研究テーマとし、シン



開会前に挨拶を交わす平野総長と佐上海交通大学環境科学行学院院長



シンポジウムの様子

ポジウムではメインテーマを「南水北調－経済発展と水資源の政策的・技術的課題」として、南水北調（長江の水資源を貯水し、南から北へ送水する大導水事業）にまつわる中国の経済発展と水資源の政策的・技術的課題を討議しました。

開会に先立ち、平野総長、佐 彦卿上海交通大学環境科学行学院院長、李 天然中国駐名古屋総領事の挨拶があり、次いで林実行委員長（環境学研究科長）およびサイモン・ウォリス AC21推進室副室長（同研究科准教授）からこのシンポジウムの趣旨、国際学術コンソーシアム（AC21）が共催として参加した趣旨について説明がありました。

続いて、「経済発展、南水北調、そして汚染」、「水循環と内水域の生態・生息」および「水質汚染と浄化技術」について、それぞれ、本学および上海交通大学の研究者による発表の後、それらに対するコメントおよびディスカッションが行われました。

会場は120名を超える参加者で埋め尽くされ、「日中環境研究交流会」の記念すべき第1回として、今後の日中環境研究交流の礎を築くことができました。次回は上海交通大学において開催される予定です。

## AC21学生ミニフォーラム2007を開催

11月15日(木)から17日(土)、AC21学生ミニフォーラム2007が開催され、上海交通大学から2名、復旦大学から1名、本学から5名の総勢8名の学生が参加し、中国における環境問題を中心に議論を行うとともに、交流を通じて相互理解を深めました。

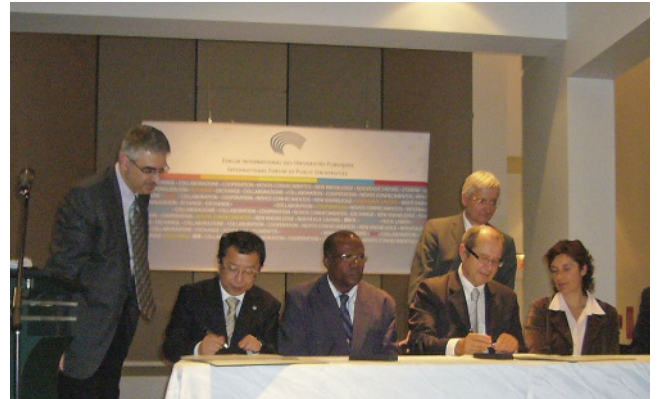
この学生ミニフォーラムは、本学及び上海交通大学が主



学生ミニフォーラム参加者

催し、AC21が共催した第1回「日中環境研究交流会」と連携し実施されました。1日目は環境総合館レクチャーホールで行われた「日中環境研究交流会」の研究者シンポジウムに参加し、2日目はアドバイザーを含めて約20名で学生会議を開催し、3日目は名古屋市下水道処理場など水と環境に関する施設を見学しました。学生会議では、本学の学生が司会役となって議事を進行し、長江の水を黄河に引き入れる中国の巨大プロジェクト「南水北調」の賛否をディベートするなど、活発で有意義な議論となりました。「日中環境研究交流会」に参加した研究者からも、学生の参加が大変刺激になったという感想が寄せられました。

# 本学が International Forum of Public Universities に加盟



IFPU コミュニケにサインする山本理事（左から2人目）

10月11日(木)、12日(金)の両日、カナダのモントリオールにおいて、第1回 International Forum of Public Universities (IFPU) が開催され、本学から、山本理事及び岩城奈巳 AC21推進室・留学生センター准教授が参加しました。IFPU はモントリオール大学が世界の公立大学に呼びかけて創設した新しい大学コンソーシアムであり、日本を代表する大学として本学に参加要請があったものです。この創立メンバーには、4大陸、20カ国から21大学が加盟しています。(URL <http://www.fiup.umontreal.ca/en/events/index.html>)

今回の会議では、まず、創設の経緯やIFPUに期待する国際的な学術ネットワークの役割について、リュック・ヴィネモントリオール大学長から紹介があり、ついで、今後の活

動について各参加大学からさまざまな提案が出されました。とくに、今後どのようにネットワークを活用し、教員の交流、留学生の受入れ・派遣、そして各メンバー間の連携・研究交流を推進していくかが話し合われました。12日には、“文化の多様性”と題する公開パネルディスカッションが行われ、一般聴衆も含めてフロアからも様々な意見が飛び交い、活発な意見交換が行われました。

次回第2回会議は、来年、フランスの新ソルボンヌ大学(パリ第3大学)での開催が決定し、IFPU及びグローバル高等教育の発展へのさらなる期待とともに幕を閉じました。参加大学は4大陸の多様な地域から集まっており、地域的に広い視野の国際的ネットワークに参加できる意義は大きいものと期待されます。

## IFPU 加盟大学 (2007/9/20現在)

アジア	中国	南開大学 北京大学	ヨーロッパ	ベルギー	ブリュッセル自由大学
	インド	ジャワハルラール・ネルー大学		チェコ	プラハ・カレル大学
	日本	名古屋大学		フランス	新ソルボンヌ大学 (パリ第3大学)
	モロッコ	モハメド5世大学		ドイツ	フライブルク大学
アフリカ	セネガル	ダカール大学 (シェイク・アンタ・ジョップ大学)		イタリア	ボローニャ大学
	カナダ	モントリオール大学		ルーマニア	ブカレスト大学
北米	アメリカ	カリフォルニア大学		ロシア	モスクワ大学
	メキシコ	メキシコ国立自治大学		スペイン	バルセロナ大学
中南米	アルゼンチン	ブエノスアイレス大学		スイス	ジュネーブ大学
	ブラジル	サンパウロ大学			
	チリ	チリ大学			



## 平成19年度名古屋大学大学院秋季入学式を挙行

平成19年度名古屋大学大学院秋季入学式が、10月23日(火)、野依記念学術交流館2階カンファレンスホールにおいて挙行されました。

この式は、大学院留学生特別コース及び医学系研究科修士課程医科学専攻医療行政コース(ヤング・リーダーズ・プログラム)に入学する留学生に加え、一般学生についても同時に執り行われました。

大学院留学生特別コースは、開発途上国等でニーズの高い分野において、短期間に学位を取得したいという要望に応えて、日本語を用いず英語による研究指導を行うコース

で、留学生の大半は、大学推薦による国費留学生で占められています。また、医学系研究科修士課程医科学専攻医療行政コースは、開発途上国の次世代を担う行政官(ヤングリーダー)で、原則経験年数5年程度以上の40歳までの方を日本に招き、1年間の英語による教育で修士学位を与えるコースです。今年度は、法学研究科13名、理学研究科1名、医学系研究科14名、工学研究科23名、環境学研究科7名の計58名が本学で学ぶことになりました。

式典は、平野総長をはじめ理事、監事、副総長及び研究科長の列席のもと、名古屋大学交響楽団による奏楽で始まり、入学生紹介、総長の辞、役員等への紹介に続き、工学研究科の孫 凱さん(中国)が入学生総代として宣誓を行いました。

閉会後には、列席者、陪席の指導教員等を交えて記念撮影が行われ、入学生は、これからの学生生活に期待を膨らませていました。



入学生総代による宣誓



記念撮影

## 平成19年度名古屋大学新入留学生歓迎懇談会を開催

平成19年度名古屋大学新入留学生歓迎懇談会が、11月2日(金)、南部食堂において開催されました。この会は、今年度春季新入留学生歓迎懇談会が麻疹の流行により延期となったため、春季及び秋季の両季新入留学生を対象として開催されたもので、今後の留学生活が実のあるものになるよう激励し、留学生と留学生関係教職員との懇談を通して、

一層の相互理解・交流を深めることを目的としています。当日は、新入留学生、教職員など約400名の参加がありました。

最初に、平野総長から歓迎と激励のあいさつがあり、これを受け、新入留学生を代表して、環境学研究科博士課程(後期)1年の張 宁宁(中国)さん及び留学生センター日本語・日本文化研修生のSEN Rana(インド)さんが、日本での留学について抱負を述べました。続いて、杉山副総長の発声により乾杯が行われた後、新入留学生が総長や教職員を囲んで、にこやかに記念撮影したり、歓談したりする姿があちらこちらで見られました。また、11月1日(木)に本学の「混声合唱団」および「コール・グランツェ」とジョイントコンサートを行ったストラズブル大学コーラス隊「ララッシュケール」が飛び入りで参加し、2曲の合唱を披露しました。最後に、石田留学生センター長の閉会のあいさつがあり、懇談会は盛況のうちに終了しました。



懇談会の様子

## 石原一彰工学研究科教授が第21回「日本 IBM 科学賞」を受賞

石原一彰工学研究科教授が、第21回「日本 IBM 科学賞」(化学分野)を受賞しました。

同賞は、日本における科学分野の学術研究の振興と若手研究者の育成に寄与することを目的に、日本 IBM 株式会社が1987年に創設し、国内の大学ならびに公的研究機関に所属する45歳以下の研究者で、物理、化学、コンピューター・



日本 IBM 科学賞授賞式 (江崎玲於奈審査委員長より授与)

サイエンス (バイオインフォマティクスを含む)、エレクトロニクス (バイオ エレクトロニクスを含む) の4分野における基礎研究で優れた研究活動を行っている方を対象に選考し、本年は112件の応募の中から5件が採択されました。

受賞理由は、酵素の作用機構を手本に、「酸と塩基の空間特異的な配置」と「反応基質の取り込み機能の付与」という単純明快な触媒設計戦略をもとに、有機合成化学の研究分野に新機軸を打ち立て、基礎科学の発展に大きく貢献したことによるものです。

なお、授賞式は、11月20日(火)、千代田放送会館 (東京都千代田区) で開催され、受賞者本人による研究内容の発表も行われました。

## 日本数学コンクール表彰式を挙行政

平成19年度日本数学コンクール表彰式が、11月3日(土・祝)、野依記念学術交流館において、受賞した生徒とその保護者等約100名が出席して挙行政されました。

表彰式は、東海高校吹奏楽部による弦楽四重奏の演奏で幕を開け、続いて同コンクール委員会会長を務めた大峯理事及び山田知子愛知県教育委員会指導主事から挨拶があった後、数学コンクール・ジュニア数学コンクール・数学コンクール論文賞の順に、優秀な成績を取めた受賞者に対して賞状、メダル及び副賞が授与されました。

続いて、大賞及び論文賞金賞を受賞した生徒からそれぞれ受賞の喜びと感謝の言葉が述べられました。

表彰式終了後には、「問題解説」が実施され、問題作成委員会の各先生方から問題に対する解答と、そこに辿り着く過程や考え方について解説が行われました。問題を解く中でユニークな発想から生まれた解答を引き出した例等の解説もあり、参加した小中高生は、メモを取りながら熱心に聞き入っていました。



大峯理事から表彰される受賞者



シニアの受賞者たち

## フランス・ストラスブール大学コーラス隊と本学の混声合唱団及びコール・グランツェとのジョイント・コンサートを開催



コンサートの様子

フランス・ストラスブール大学のコーラス隊ララシュ・クールと本学の合唱団とのジョイント・コンサートが、11月1日(木)、IB電子情報館大講義室において開催されました。当日は、コンサートに先立ち代表学生5名が平野総長を表敬訪問し、コンサート会場には、山本理事をはじめ学内外から多数の観客が集まりました。コンサートでは、最初にフランス側及び日本側のそれぞれの単独演奏が、次に合同演奏が披露されました。本学混声合唱団とコール・グランツェはこの日のために合同して出演し、バラエティー豊かな演奏会となって、観客を魅了しました。最後には、モーツァルトの曲と日本の歌「ふるさと」を合同演奏し、聴衆から満場の喝采を受けました。その後に行われた交流会では、両大学の合唱団員がお互いに大きな刺激を受けたことに感激し、両大学間の幅広い交流の意義があらためて感じられました。

## 平成19年度名古屋大学職員創作美術展を開催



会場の様子

平成19年度名古屋大学職員創作美術展が、10月24日(水)から10月26日(金)までの3日間、野依記念学術交流館において開催されました。

この美術展は、職員自ら創作活動を楽しみ、美術作品等の鑑賞を奨励するとともに、潤いのある情操豊かな生活、余暇の一層充実した活用を促し、生活に根ざした文化の普及・高揚に資することを目的として毎年開催されているもので、今年で15回目を迎えました。出展種目も絵画、絵手紙、陶芸、写真、書道、生け花及び手工芸と幅広く、多くの力作が展示され、延べ250名を超える鑑賞者が、芸術の秋を心ゆくまで満喫していました。

## 平成19年度名古屋大学新規採用職員フォローアップ研修を開催



研修風景

平成19年度名古屋大学新規採用職員フォローアップ研修が、10月19日(金)に実施され、受講者27名が、3年後の夢を描くドリームマップの作成をしました。

ドリームマップとは、今回の研修を実施した(株)エムズが考案し、経済産業省の起業家教育促進事業のプログラムとして採択されたもので、将来の夢や目標を明確に設定して行動するためのツールとして、現在では全国の公立学校で授業の一環として、また、一般企業の社員や行政職員を対象として新入社員研修や3年目研修で実施されているものです。受講者は、お気に入りの写真や雑誌の切り抜きなどを駆使し、器用に3年後の自分をドリームマップに落とし込み、見学に来た上司の前で発表を行いました。

受講者は本学に就職して半年が経ち、慣れると共に当初の決意や目標を忘れかけていく頃でもあり、今回のドリームマップ作成によって、また新たな決意をもって今後活躍していくことが期待されます。

## 平成19年秋の叙勲受章者決まる

－ 本学関係者5名が喜びの受章－

平成19年秋の叙勲の受章者が発表され、本学関係者では次の方々を受章されました。

### [ 教育研究功労関係 ]

#### 瑞宝中綬章

齊藤 隆夫 名誉教授（経済学部）  
元経済学部長  
元名城大学大学院商学研究科長

#### 瑞宝中綬章

横山 昭 名誉教授（農学部）  
元名古屋芸術大学教授

#### 瑞宝中綬章

青木 國雄 名誉教授（医学部）  
元愛知県がんセンター総長

### [ 保健衛生・看護功労関係 ]

#### 瑞宝双光章

浅井 正樹 元医学部附属病院医療技術部長

#### 瑞宝単光章

花木 玲子 元医学部附属病院看護部副看護部長

## 平成19年度愛知地区国立大学法人等退職準備セミナーを開催



熱心に聴講する参加者

平成19年度愛知地区国立大学法人等退職準備セミナーが、10月26日（金）、野依記念学術交流館において、愛知教育大学・名古屋工業大学・豊橋技術科学大学・豊田工業高等専門学校・自然科学研究機構岡崎地区の5機関との共催により開催され、平成23年度までの定年等退職予定者とその配偶者、あわせて154名が参加しました。

今回のセミナーは、財団法人教職員生涯福祉財団の専門講師である鮎川史郎講師による「生涯生活設計の必要性・退職後の生きがいプラン」、設楽 徹講師による「共済年金・退職後の医療保険」及び芳賀正保講師による「経済生活プラン（経済生活・資金運用）」、また、特別講師に押田芳治本学総合保健体育科学センター教授を迎え「退職後の健康管理」の講演が行われ、参加者は熱心に聴講していました。講演終了後に設けた個別相談コーナーでは、多数の相談が寄せられるなど、参加者の関心の高さがうかがわれ、セミナーは盛況のうちに終了しました。

# がんと神経疾患の病理解明を求めて

榎本 篤 高等研究院特任講師

私達病理医は、がんで亡くなった方を解剖して臓器標本を作成し、どんなタイプのがん細胞で、それがどこまで広がっていたか、またどこまで転移していたかを観察する機会がよくあります。がん細胞は、他の正常細胞よりも本当に元気がよくて、無秩序に増え続け、どんなに制止されても暴走しているように見えます。その傍若無人ぶりには、正常の組織に調和するように更生させるのは到底無理なのではないかと絶望感さえ抱きます。それでも私達はがん細胞が無秩序に暴走するのを防ぐ方法をなんとか見つけられないかと考えて日々研究しています。

私達は、がんで活性化されている Akt というがん遺伝子が生み出すタンパク質に注目してがん細胞の生態に迫ろうと考えています。これまでの

研究で、Akt が異常に活性化されると細胞はがん化し、暴走を始めることが明らかにされています。私達は Akt の良き (?) パートナーを探す実験を行い、Girdin/Ccdc88a (以下 Girdin) という新たなタンパク質を同定しました。Girdin は細胞骨格の機能に関わる分子で、Akt からリン酸化という命令を受けるとがん細胞の運動性を増強する作用をもっていることが明らかになりました (図1)。培養皿中におけるがん細胞の運動性は、生体内でがんの浸潤や転移と関わってきます。実際のがんの患者さんからの臨床検体で調べてみると、一部の乳がんなどの検体で Girdin の発現量が上昇していることが明らかになりました (図2)。

Girdin は神経細胞にも存在していることがわかってきました。がん細胞と神経細胞は、細胞の挙動や機能は違っても、共通の部品 (タンパク質) を使用していることはよくあります。Akt と Girdin が神経細胞で一体何をやっているのか、もしかしたら意外な面白いことがわかるのではないかと、期待をこめて研究を進めています。

テーマ主導型の大型研究が注目される機会が多い中、地味な研究室で何ができるか、フェラーリのような自動車会社に対して町工場に何ができるか、そのために何をツールにするかと日々考える毎日です。

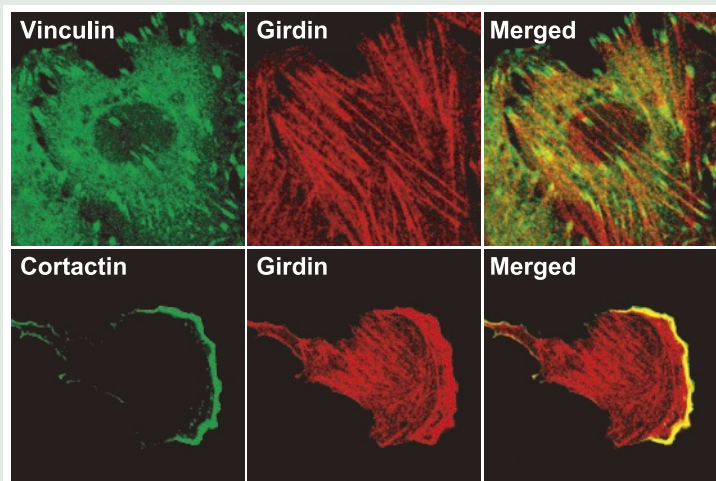


図1 線維芽細胞における Girdin の発現様式。Girdin を赤で、細胞接着関連分子 Vinculin と骨格関連分子 Cortactin を緑で示す。

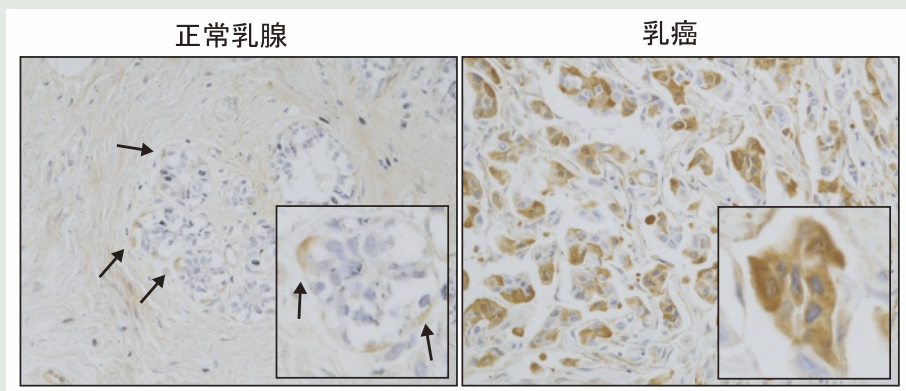


図2 正常の乳腺 (左) と乳癌 (浸潤性乳管癌、右) における Girdin の発現 (茶色)。

# 情報通信分野における競争の法と政策

林 秀弥 大学院法学研究科准教授／高等研究院教員

情報通信事業では、規制改革と技術革新の進展により、音声／データ／映像／、固定／移動、無線／有線、ナローバンド／ブロードバンドといった従来の区分が統合・包摂され、これまでになかった種類のサービスが出現するなど、IP化、ブロードバンド化が進み、通信と放送との融合・連携が進むなど、その競争状況は非常に複雑化してきています（図1）。また、かかる状況の中、競争の進展状況の評価を適切に行い、かつその妥当なあり方について検証をおこなっていくことの重要性はますます増大してきています。

数年前からわが国では、情報通信の推進による国民生活の向上が産業界のみならず、社会全体の進むべき方向として広く認められています。政府の役割として、市場競争を重視した規制改革と競争政策の推進があげられています。ICT（Information and Communication Technology, 情報通信技術）の進展が多様な形で、市場競争を国際的規模で、かつ質的にも変化させつつあると

いう状況の下で、欧米のマイクロソフト独禁訴訟に代表されるように、競争を制限するような市場支配的地位にある企業の出現、あるいは巨大企業による市場支配地位の濫用をどのように抑止し、「公正かつ自由な競争」を維持・促進していくかが、先進諸外国に共通する課題となっているのです。

では、ICTの急速な進化に伴って、法律はそれに対応できているのでしょうか。残念ながら、現状は、必ずしもそうではありません。現在の通信法制（電気通信事業法）は、「通信」利用を想定して、設備性の有する通信サービスの直接的外部性に着目し、①電気通信事業者（設備保有者）に一般的に不当差別禁止、利用者保護義務、相互接続義務を賦課する一方で、②設備の寡占性等に着目して市場支配的地位の濫用規制（指定電気通信設備制度）を導入しています。このような濫用規制を導入している趣旨としては、電気通信分野には、ネットワーク産業としての外部性が存在する中、ボトルネック設備の存在や市場シェア等に起因して市場支配力を有する事業者が既に存在するため、競争が進みにくいことが挙げられています。

しかし、「コンテンツ配信・商取引基盤」としてのICTネットワークの性格の変化や、そこでの「ボトルネック」の発生の多様化を考えれば、設備性を伴うボトルネックのみを対象として支配的地位の濫用規制を適用し、その他のプラットフォーム機能には（不当な差別的取扱いの禁止など）電気通信事業者一般に適用されている最低限の規制すらかからない状況では、ICTネットワー

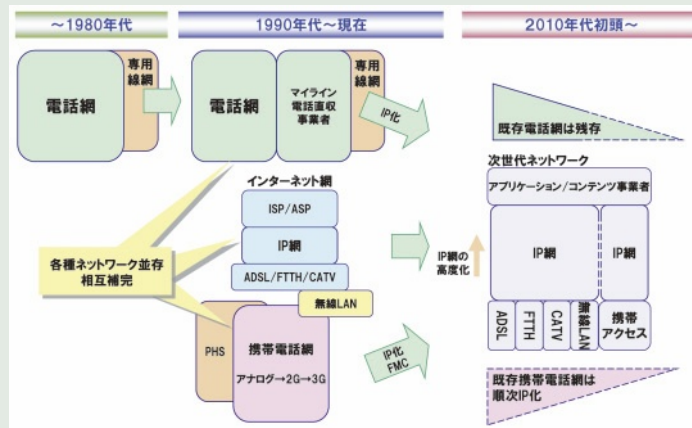


図1 情報通信ネットワークの変遷

クの自由な利用を確保する観点からアンバランスであることは否めず、ICT ネットワーク全体の利用者保護の点でも不十分です。

このため設備性を伴わないものについても、「情報の自由な流通」や「すべての国民の情報通信技術の恵沢の享受」という視点から、社会的に影響のある機能については必要な規律を課すとともに、その対象範囲や規制の強度については、通信・放送法制の支配的地位濫用規制も援用し、設備の不可欠性を考慮して検討すべきはないか、が問われているのです(図2)。

すなわち、通信・放送の伝送機能が融合し、ICT ネットワークとしてその主たる機能の重点を「通信」から「コンテンツ配信・商取引基盤」に移していくなかで、第一に、情報の自由な流通や公正競争確保、利用者保護の観点から、課金・認証機能などのいわゆる「プラットフォーム」機能の位置づけについてどう考えるか、第二に、プラットフォーム機能がネットワーク外部性に伴い寡占的傾向をもつなかで、設備性の有無にかかわらず、情報通信サービスを行う上で必要不可欠として認められる機能に対し、一定のオープン性を担保することについてどう考えるか、第三に、寡占性の有無にかかわらず、ICT ネットワークのインフラとしての役割を確保するため、セキュリティ機能など、利用者保護の観点からネットワーク上の全ての主体に標準的に普及させるべき機能

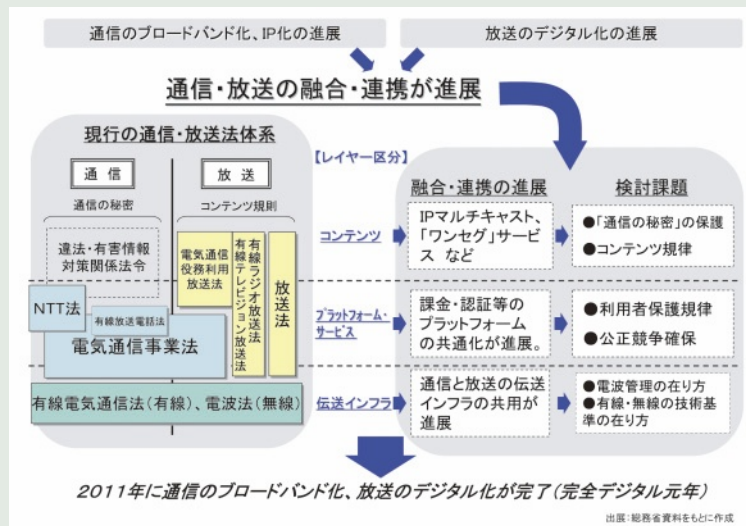


図2 通信と放送の融合

の導入やオープン性の確保をプラットフォームに求めることについてどう考えるか、という点が問題となっています(この問題について、詳しくは、総務省「通信・放送の総合的な法体系に関する研究会」第8回での筆者のプレゼン資料をご参照いただければ幸いです)。

以上はほんの一例ですが、情報通信分野において「公正かつ自由な競争」の確保をいかに図っていくか、がいま課題となっているのです。幸い、テーマとしての重要性が認められて、高等研究院の平成19年度研究プロジェクト(【情報通信事業分野における「競争評価」の理論的・比較法的研究】)に採択していただくことになりました。今後は、筆者の専門である経済法の観点から研究を進めるとともに、かつ、それだけにとどまらない分野横断的な研究をも志向していきたいと思っています。

京都大学助手、神戸市外国語大学専任講師を経て、2005年より名古屋大学大学院法学研究科助教授。同年より公正取引委員会・競争政策研究センター主任研究官を兼任する。2002年度横田正俊記念賞(財)公正取引協会)受賞。また、2007年に名古屋大学高等研究院研究プロジェクト「情報通信事業分野における「競争評価」の理論的・比較法的研究」が採択され、同研究院教員として、情報通信における競争政策のあり方について、研究を進めている。現在、総務省「競争評価アドバイザーボード」委員(2006年11月～)を務める。  
趣味：ブラームスの音楽を聴くこと。

はやし しゅうや



## インドネシアでインターンシップ



東ジャワ州パスルアンの村で住民から聞き取り調査を実施。筆者中央。

段々畑が広がる山間に暮らす人々の美しい生活風景が忘れられない。年収はおよそ3千円～1万円だと言われるが、赤やピンクの花で飾られた家々や素朴な人々の笑顔が印象的だ。高層ビルが立ち並ぶインドネシアの首都ジャカルタから1時間ほどの空旅で自然豊かな島々へ降り立つと、目の前に広がる風景に「一つの国でこんなにも異なるものか」と驚かされる。2007年9月の1ヶ月間、大学院で研究している国際協力の現場を体験してみようと、国際協力銀行（JBIC）ジャカルタ事務所にてインターンシップを行った。

JBICは、円借款により開発途上国における電力・ガス、運輸、通信、農業といった経済社会基盤整備を支援する政府開発援助（ODA）実施機関である。インターンシップ期間中、JBICのプロジェクトサイトの視察、世界銀行や国連開発計画など他援助機関との面談に同席、リサーチ業務

の担当等、国際協力業務を内容盛りだくさんに体験した。

視察したスラヴェシ島のある村では、JBICの円借款によって提供された水タンクがプロジェクト終了後6年経ったにも関わらず、生活に欠かせないものとして村人に利用されていた。この村には井戸がなく、水タンクがなければ女性や子どもたちが遠く離れた井戸から重い水運びをしなければならない。「安全な飲み水が手に入って嬉しい」と、村の女性たちは言う。この村では、住民組織が村人から毎月費用を集め、水タンクの維持管理を行っている。このように、村人の手によって活動が維持され、人々の生活が改善される仕組み作りが重要ではないか。ただ、インドネシアは1万数千の島々からなる国であり、人々の日常会話言語や宗教、生活環境のあらゆる面において多様性が見られる。そのような中でのプロジェクトのターゲティングやマネジメントの難しさを感じた。

訪問した各地で、日本人の援助機関職員やボランティア、専門家、各政府機関で働くインドネシア人元留学生に出会った。彼らの活躍に希望や励ましをもらい、私も国際協力の分野に貢献できる人材になりたいと決意を新たにしている。あの段々畑のように、目の前には挑戦したいステップが広がっている。



水タンクは洗濯にも欠かせない。



## 平成19年度愛知県国際交流推進功労者表彰を受賞して

大学院国際開発研究科国際開発専攻博士課程前期課程2年  
山田 みの理



受賞を喜び合う EIUP メンバー

この度、国際開発研究科の大学院生が中心に活動を行っている国際理解教育プログラム (Education for International Understanding Program; EIUP) が愛知県国際交流協会による国際交流推進功労賞を頂くことになりました。これは七年の活動を通じて初の受賞であり、EIUP の国際理解教育活動が県レベルで公式にその実績を認めて頂いたことを意味するため、大変光栄に思っております。

私たち EIUP は2000年に国際開発研究科創立10周年記念事業として立ち上げられ、今年で8年目を迎えております。国際開発研究科は、様々な文化的背景、経験を持つ大学院生が、国際的視野から開発・協力・交流について学んでいる特性を生かし、地域の国際化に貢献するために国際理解教育の出前講座を行っています。この出前講座（デ

リバリー）とは、児童・生徒があまり接することのない留学生や海外で活躍する日本人と実際に交流することにより、身近な視点からの国際理解教育を行うことを目的としています。具体的には、東海地区の小・中学校等に講師となる留学生と EIUP スタッフがお邪魔し、留学生の国の文化などについてクイズ形式で紹介し、またその国のゲームなどを通じて異文化理解の場を提供しています。

学習指導要領にも国際理解教育が総合的な学習の時間の一項目として取り上げられていますが、教育現場では先生方は実際にどのように授業を行ったら良いか試行錯誤を繰り返されています。私たち EIUP は、そんな先生方と共により良い授業を児童・生徒に提供するために日々活動しています。また、より良い授業には講師となる留学生とのコミュニケーションが大変重要であり、留学生も自国に関する伝えたいことがたくさんあるので、授業の内容をスタッフが学校の先生と留学生の間に入って共に創っていきます。現在は児童・生徒が楽しみながら学べるようクイズやゲームを交えた活動が多いですが、一校へのデリバリー回数を増やすことでより深い内容を提供していきたいと考えています。今回このような賞を頂けたということで、より良いデリバリーのために精進していきたいと思っております。

国際理解教育プログラム (EIUP) 事務局  
国際開発研究科内2階 205号室  
TEL/Fax : (052) 789-5082  
E-mail : gsideiup@gsid.nagoya-u.ac.jp  
URL : <http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/eiup/index.html>

やまだみのり  
EIUP14・15期代表  
1983年生まれ  
愛知県出身



鈴木礼治氏（財団法人愛知県国際交流協会会長）から表彰を受ける EIUP メンバー

## 20. 豊田講堂（第2回）

豊田講堂改修・増築工事の概要について前回の誌面で簡単に触れましたが、その詳細を今回から2回に分けて紹介します。

### ■アトリウムの増設

豊田講堂の改修・増築工事で、外観及び機能面において従来から最も大きな違いを生み出しているのが、隣接するシンポジオンとの間に屋根を架け、2つの建物を一体化する大きなアトリウム空間（ホワイエ）を増設したことです。

このアトリウムは、約600m<sup>2</sup>の面積と約10mの高い天井を持ち、2つの既設建物の空間と機能を有機的に結ぶことで、一体化された複合施設の利用を活性化するスペースとして、既存施設各々の機能拡張が期待できるものです。その例として、

- ・アトリウム空間への座席設置により、既存施設では対応できなかった2000人を超える人員の収容が可能となること。
- ・国際会議等で、大小のホールと複数の会議室を駆使したプログラムの設定や、アトリウムを交流スペースとして利用できること。

などが挙げられます。

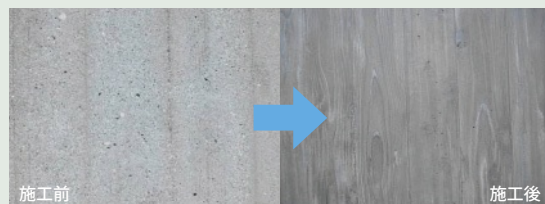


### ■ギャラリーの整備

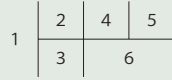
豊田講堂は、東山キャンパスの中心部で表玄関に位置すること、また収容人員規模がキャンパス随一であることから、これまで大規模なイベントに利用されてきました。しかし、展示や情報発信における利用者のニーズを満たす機能面の充足という点では、野依記念物質科学研究館、野依記念学術交流館やIB電子情報館等、新しい施設に席を譲る状況となっていました。

改修計画では、従来は吹きさらしの半屋外空間となっていた2階ピロティを屋内ロビーとして取り込み、アトリウムの大空間との連続性を持たせました。また、新しい2階ロビーには、展示用の可動パネルを設けたことにより、ポスターセッションやギャラリー等の利用を可能としています。

改修・増築によって新たに確保されたこれらの屋内空間は、従来型のイベントのみならず、自主企画によるコンサートや展示、アートパフォーマンス等、幅広い対応が可能となります。また、地域に対する新しい情報発信拠点としても、積極的な利用が期待されます。



- 1 仕上げ工事が佳境に入ったアトリウム
- 2 コンクリート打放し復元工法
- 3 製作が終わった杉板本実型枠
- 4 コンクリート面暴露試験
- 5 雨垂れ汚れの状況と対策
- 6 西立面劣化ランク図

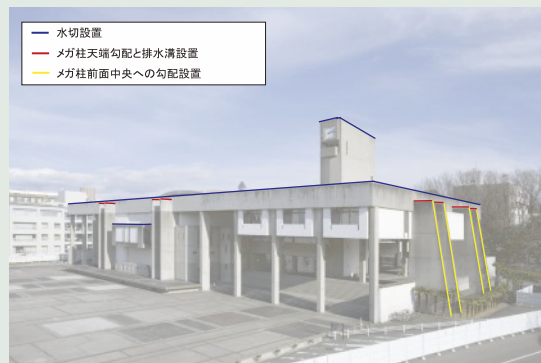
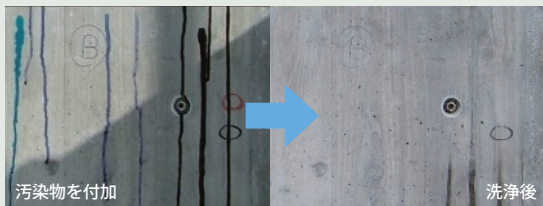


## ■外観の復元

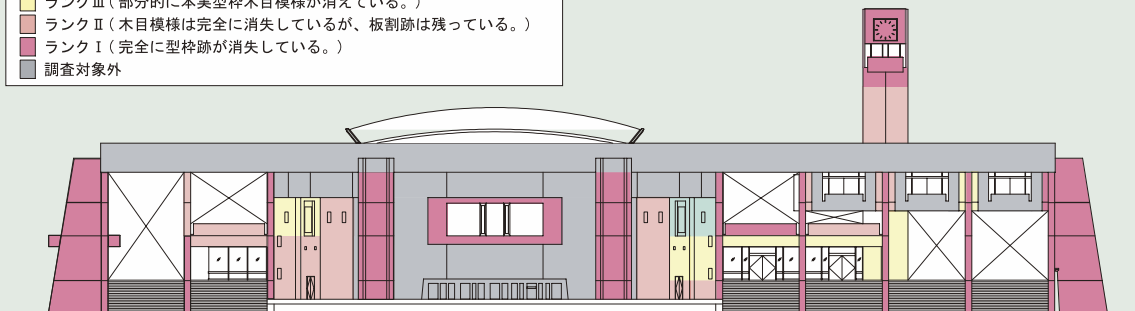
豊田講堂は、名古屋大学のシンボルであるとともに、日本の代表的な近代建築のひとつとして広く認知されています。その特徴として、巨大な架構を持つ力強い外観デザインが挙げられます。改修計画では「意匠の保存継承」をコンセプトとして掲げました。その中でもコンクリート打放し(杉板本実型枠を使用)の復元は、以下の手法に見られる入念な取り組みから、クオリティの極めて高い仕上がりを実現しました。

- ・外壁調査による表面劣化のランク判定。
- ・ランクに応じた補修方法を検討し、試験施工を繰り返し実施。
- ・暴露試験による効果の検証。
- ・試験施工および検証結果に基づき復元工法を採択。
- ・効果的な品質管理方法の立案と実践。
- ・熟練工による杉板本実型枠の製作と施工。

さらに、壁面の雨垂れ汚れ対策として、各部に金属製の水切りを設置しています。これらの部材の形状は、元々の外観デザインを損なう事がないよう、詳細な検討を重ねたものです。



- ランクⅤ(本実型枠模様が完全に残っている。)
- ランクⅣ(本実型枠模様に劣化が見られるが、消えている部分はない。)
- ランクⅢ(部分的に本実型枠木目模様が消えている。)
- ランクⅡ(木目模様は完全に消失しているが、板割跡は残っている。)
- ランクⅠ(完全に型枠跡が消失している。)
- 調査対象外



建物全体を包んでいた仮設のシートと足場が取り外された時に「色は？タイルは？何も変わっていない。」と肩透かしを食らった方も多いと思います。しかし、復元工法によって得られたきめ細かなコンクリートの生地に一度触れてみて下さい。また、日常何気なく通り過ぎていた豊田講堂の前庭で、そのファサードを見上げてみて下さい。時間の移ろいと共に、変化に富んだ表情を見せる豊田講堂の外観デザインの魅力を、きっと再発見できることでしょう。

(施設管理部)

# 文学部創立60周年記念学術講演会・学術シンポジウム 及び記念式典を挙行

●文学部



学術シンポジウムでのパネリストによるフリートーキング

文学部は、11月3日(土)、創立60周年を記念して学術講演会及び学術シンポジウムをIB電子情報館大講義室において開催しました。

午前の部では、高山 博東京大学人文社会系研究科教授を講師に招き、「人文学の未来」と題する学術講演会を行いました。高山教授は、人文学が現代社会にとって必要不可欠な学術分野であるにもかかわらず、その維持と後継者の育成が重大な危機に陥っているという認識を示しました。これを乗り越えるために大学がなすべきことは、長期的には教養教育を充実させ、人文学の意義を広く学生に教授すること、教育能力に優れた教員を重点的に配置すること、また、特に優れた研究業績を挙げた研究者を厚遇し、教育負担を減らし、研究に専念できるような人事配置の差異化によるスターシステムを導入することであると強調しました。

また、午後の部では、『「危機」を超える人文学』をテーマに学術シンポジウムを開催しました。4名のパネリスト(本学文学研究科の坪井秀人教授(日本近代文学)、吉武純夫准教授(西洋古典学)、和崎春日教授(文化人類学)

及び余語真夫 同志社大学文学部教授(心理学))が、それぞれの専門分野から人間と社会の「危機」について報告を行いました。その後のフリートーキング方式の討論では、質疑応答が活発に行われ、人文学における最先端の研究に対する社会の関心の高さが示されるとともに、人文学の持つ現代的意義と社会的有効性があらためて確認され、非常に有意義なシンポジウムとなりました。

学術シンポジウム終了後、学外に会場を移し、文学部創立60周年記念式典を挙行了しました。

記念式典では、町田文学研究科長の式辞に始まり、平野総長の挨拶の後、来賓として、文部科学省高等教育局の小島浩孝国立大学法人支援課課長補佐から、清水 潔文部科学省高等教育局長の祝辞が代読され、引き続き、天野文雄大阪大学文学研究科長及び阿部泰明南山大学人文学部長から祝辞が述べられ、本学文学研究科の高い学術研究水準が讃えられました。最後に、若尾教養教育院長(元文学研究科長)から、今後の文学部・文学研究科の展望について報告がありました。

記念式典終了後、祝賀会が開催され、本学学生オーケストラによる四重奏が奏でられる中、杉山理事(元文学研究科長)の挨拶、田中良一文学部同窓会代表幹事の心温まる祝辞があり、高橋理事の発声により乾杯が行われました。その後、丹羽兎子文学部同窓会代表幹事から学生生活等の回想が語られるとともに、森 正夫名誉教授(元文学部長)から、「このような立派な記念式典及び祝賀会が催されたことは、文学部が着実に力を付けてきた証であり、大変感動している」と感想が述べられるなど、祝賀会は盛況のうちに閉会しました。



式辞を述べる町田文学研究科長

# 第8回オープンフォーラム「大学と国際協力機関との組織連携の強化—大学国際化戦略の一環として—」を開催

●農学国際教育協力研究センター



パネルディスカッションの様子

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、10月29日（月）、30日（火）に第8回オープンフォーラム「大学と国際協力機関との組織連携の強化—大学国際化戦略の一環として—」を、関係大学の教職員と文部科学省、国際協力銀行（JBIC）、国際協力機構（JICA）の関係者を招聘して、野依記念学術交流館において開催しました。今回のフォーラムは、「大学と国際協力機関との組織連携の強化—大学国際化戦略の一環として—」のテーマの下、国立大学が法人化後、国際協力事業を受託するにあたり、抱えている問題点とその克服の方法について、関係者による発表と、パネルディスカッションが行われました。

初日の冒頭、山内同センター長、山本理事の挨拶の後、杉本充邦同センター准教授から国際協力事業受託についての本学の組織、制度・規程上の問題とその改善のための提案を含んだ問題提起が行なわれました。次いで、大学による国際協力事業の実施上の問題点とその解決に向けた事例報告が、4大学から以下のとおり行なわれました。「JICAとの連携融合プロジェクト」(長澤秀行帯広畜産大学理事)、「修士学位授与を目的としたJICA 長期研修『持続的農村

開発コース』（16ヶ月）」(弦間洋筑波大学教授)、「草の根技術協力事業『ベトナム中部自然災害常襲地での暮らしと安全の向上支援』」(田中樹京都大学准教授)、「受託型技術協力プロジェクト『インドネシア国ガシヤマダ大学産学地連携総合計画』」(糸井龍一九州大学教授)。

2日目は、梅澤 敦文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室長、五十嵐禎三政策研究大学院大学教授、大金正知国際協力銀行プロジェクト開発部次長、村上正博国際協力機構国内事業部長から「文部科学省及び国際協力機関から見た大学との連携強化のあり方」についての発表と、発表者4名に本学関係者を加えたパネリストによる「国際協力事業実施促進のための大学体制整備について」のパネルディスカッションが行われました。

今回のオープンフォーラムでは、国立大学の法人化後、各大学が従来の教員個人の国際協力への協力から、大学組織の本体事業としての国際開発協力事業の受託をめざして、関係規程の整備、国際担当部署の設置や職員の配置、研究者情報データベースの整備など学内の体制の整備に努めている現状が確認されました。他方、2日間の議論を通じ、公募・公示情報の収集、教員間の協力体制、受託した経費の使途、間接経費の配分、事業実施のための資金の立替え、事業受託のインセンティブ、事業に参加する教員の業績評価、教育・研究に加えた社会貢献での教員の活動の負荷の解消のため、教員と事務職員の分業による事務処理体制の構築の必要性、成果品の著作権の所在など、なお今後整備してゆかねばならない課題が明らかになりました。

このオープンフォーラムを受け、農学国際教育協力研究センターは、学内の国際交流協力推進本部に置かれている国際開発協力部門の下に、ワーキンググループの設置を提案し、中期目標・中期計画、国際化推進プラン（2005年12月発表）に掲げられている目標とアクション・プランの具体化に向けて、提言を行っていく予定です。



記念撮影

## 「ナノカーボン」サイエンスカフェを開催

●大学院理学研究科

大学院理学研究科は、11月3日(土)、名鉄百貨店本店内のマザームーンカフェ名古屋において、「小さい、軽い、丈夫－産業界が注目する夢の新奇炭素物質ナノカーボン」と題してサイエンスカフェを開催しました。県内各地より中学生から中高年の方々まで33名の参加があり、はじめに篠原久典同研究科教授が、講師としてお招きした



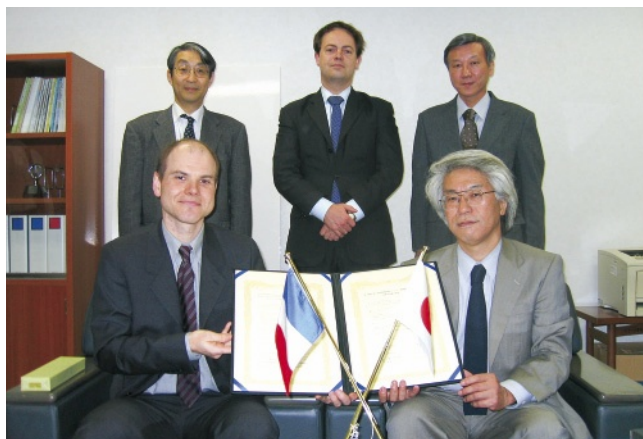
サイエンスカフェ 会場の様子

齋藤理一郎東北大学教授と共に、軽妙な語り口で興味深いエピソードを交えながらナノカーボンについて語り、参加者を科学の世界へと誘いました。サイエンスカフェは大学のアウトリーチ活動として定着し始めており、その形式はさまざまですが、今回のサイエンスカフェは、Q & Aに多くの時間が割られました。さらに、ナノカーボンを身近に感じてもらうために用意された、製品化されたフラワーレン入り化粧品を参加者が手にとって使ってみたり、素材にナノカーボンを採用したテニスラケットを実際に手にしたりしました。また、各テーブルについていた学生が、参加者にナノカーボンの模型やフラワーレン水溶液、電子顕微鏡の写真を解説するなどして、直接参加者と交流を行いました。参加者の皆さんから多くの興味深い質問や意見が出て、ナノカーボン研究の成果や可能性だけでなく、研究者の熱意や研究の醍醐味が伝わったよいイベントとなりました。また、アンケートでは、中学生や高校生のためにこのような機会が増えるとよい等、サイエンスカフェの活動に期待する意見も寄せられました。

## リヨン高等師範学校関係者が理学研究科を訪問、部局間交流協定を締結

●大学院理学研究科

大学院理学研究科は、11月8日(木)、同研究科長室において、フランス・リヨン高等師範学校との間で部局間学術交流協定の調印式を行いました。同研究科側からは近藤研究科長、関副研究科長及び協定担当窓口の鈴木順三教授、リヨン高等師範学校側からはサマリユール・リヨン高等師範学校研究機関長の代理であるジャン・マタス国際交流部長



協定式の出席者 前列左から、マタス リヨン高等師範学校国際交流部長、近藤研究科長 後列左から、関副研究科長、トレグロデ フランス大使館大学間交流担当官、鈴木教授

及びブアノ・ド・トレグロデ フランス大使館大学間交流担当官が出席しました。この協定の目的は、物理学、化学、生物学分野の教育・研究上の協力及び交流を発展させるとことにあり、調印に先立ち、理学研究科の小会議室において、鈴木教授の司会でリヨン高等師範学校関係者と本研究科の主任教員等数名が研究機関の紹介を行い、引き続き協定について活発な意見交換会を行いました。

リヨン高等師範学校は、フランスの高等教育機関であるグランゼコールの一つで、パリの高等師範学校(1794年設立)の姉妹校として1987年に発足した世界的に著名な研究教育機関です。自然科学系の10機関が集まり、数学、計算科学、物理学、天文学、地球科学、化学、生物学の分野の研究を行っています。総勢約300名の教職員が研究教育に従事し、大学院博士課程には約200名の学生が在籍しています。

これまでに同校とは研究者間の交流はありましたが、本年になってから、日本学術振興会や文部科学省大学院教育改革支援プログラムにより、同校からの招聘教授による講義や大学院生の長期留学が実施されており、今回の締結によりさらに交流の拡大が期待されます。

## 「学生との懇談会」を開催

●大学院情報科学研究科

大学院情報科学研究科は、10月18日(木)、「学生との懇談会」を開催し、各専攻から選出された5名の博士課程後期課程学生と古賀同研究科長、渡邊同研究科企画評価委員長等が参加しました。

この懇談会の目的は、平成19年4月で同研究科が創設5年目を迎えることを機に、教職員と大学院生が一体となっ



古賀研究科長等と懇談する大学院学生

てこれまでの実績と課題について討論し、検討することにより、今後の発展、展開の方向を見いだすことにあります。

第1回目となった今回の懇談会は、「研究科の夢を創る」をテーマとし、留学生、社会人を経験した学生等も参加したもので、自己紹介と自身の研究の説明の後、博士課程後期課程への進学理由や20年後の自身の将来をはじめ、いくつかのテーマに沿って意見交換が行われ、学生にとって様々な面で十分満足できる研究科であるとの意見や、施設・設備・事務に対する要望など、研究科として学生の声を聞く良い機会となりました。

また、学生にとっても、普段は接することのない研究科長や他専攻の学生と意見交換することができた有意義な場となりました。

なお、次回の「学生との懇談会」は、博士課程後期課程修了者を対象として開催する予定です。

## 日仏二国間セミナー「グローバル化で変化する日仏の国家アイデンティティ、ジェンダー関係、社会格差」を開催

●大学院国際言語文化研究科

大学院国際言語文化研究科は、11月3日(土)及び4日(日)、日仏二国間セミナー「グローバル化で変化する日仏の国家アイデンティティ、ジェンダー関係、社会格差」を、文系総合館カンファレンスホールで開催しました。同セミナーは、日本学術振興会の助成を得て行われたもので、フランス側参加者にはフランスのCNRS(国立科学研究センター)から支援があったものです。また、同セミナーでは同時通訳を採用して、日仏両国語が使用されました。

このセミナーは、グローバル化について、これまでの分析の大部分とは別の視点から、つまり、日仏それぞれの国内における国家のアイデンティティ、ジェンダー関係、社会格差等の絡み合いと変化を詳しく分析していくのをその目的としました。個々の社会現象を分析するだけでなく、

社会科学系の研究者と人文科学系の研究者が、学際的に手を携えて、それらの現象を社会・文化・歴史の中に位置づけて考察しようとするものでした。

山本理事のあいさつの後、2日間にわたって総勢19名の発表(うち1名は欠席のため代読)がありました。発表者は、フランスから7名(フランシュ・コンテ大学1名、ロベール・シューマン大学1名、マルク・ブロック大学3名(ポストドク1名を含む)、レイ・パスツール大学2名)、国内の他大学から5名、本学からは7名(情報科学研究科1名、国際言語文化研究科6名(博士課程前期課程・同後期課程の学生それぞれ1名ずつを含む))で、両日とも、発表が終わると、フロアとの活発な質疑応答が行われました。

参加者は、のべ145名にもなり、盛況のうちに終わりました。翌5日には発表者が集まり、今後の活動について話し合いがもたれました。フランス側からは、日本側と研究を続けたいこと、そのためにCNRSの期間4年の研究計画に応募したいこと、そして、同じ研究項目について日仏の研究者がペアとなって同時に研究を行い、2人が一緒に結論を出すような形式で研究をしたいとの提案があり、了承されました。



フロアとの質疑応答



記念撮影

## 地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」第4回講演会を開催

●大学院生命農学研究科附属農場



講演会の様子

大学院生命農学研究科附属農場は、10月27日(土)、附属農場農業館において、地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」の一環として、「資源動物を知り、食といのちを考える」をテーマとした講演会の第4回を開催しました。

今回は、村井篤嗣生命農学研究科准教授が「黄身の中身と白身の中身」と題して、ニワトリの卵が、母鳥の体の中でどのように作られるのか、出来上がった卵の黄身と白身の中にはどんな物質が含まれているのかについて解説しました。卵は生命の源であり、ニワトリの場合、産卵からわずか21日でヒナが孵化します。卵の中にはヒナが孵化するために必要な様々な物質が含まれていることを、参加者への質問を交えながら紹介しました。

今回は、地域の方々も含めて40名ほどの参加者があり、本学附属中・高等学校からも17名の生徒が参加しました。講演後には熱心な質疑が交わされ、「卵の中身」に興味を尽きない様子でした。

## 地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」農業ふれあい教室「親子農業体験」を開催

●大学院生命農学研究科附属農場



ミルクの入った容器を振ってバターを作る

大学院生命農学研究科附属農場は、11月10日(土)、地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」の一環として、農業ふれあい教室「親子農業体験」を開催しました。

この教室は、近隣の小学生と保護者を対象として、親子で農業を体験・学習する機会として、毎年種々の企画を実施しています。今回の「親子農業体験」には、12家族35名が参加しました。

午前中は、ミルクからのバターの作り方について説明を受けた後、全員がバター作りを体験しました。また、サツマイモ掘りを楽しみながら、一株につくイモの数や重さを測定し、イモのでき方について学びました。午後は、土、砂、水耕液で栽培されているトマトを観察・試食し、おいしいトマトの作り方について学びました。また、ヤギとウシの世話、餌やりなどを体験し、家畜とのふれあいを楽しみました。最後に、収穫したサツマイモ、自作のバター、農場で栽培した黒米の餅を試食し、秋の味覚を楽しみました。

## 第4回東海地区 CSI 事業報告会を開催

●情報連携基盤センター

本学情報連携基盤センター、本学附属図書館及び国立情報学研究所の共催で、10月5日(金)に本学情報連携基盤センター演習室にて第4回東海地区 CSI 事業報告会を開催しました。4回目となる今回は、「ネットワークとセキュリティ」をテーマとして取り上げ、国立情報学研究所が構築する SINET3、国立情報学研究所学術情報ネットワーク運営・連携本部認証作業部会が推進する「サーバ証明書発行・導入における啓発・評価研究プロジェクト」、本学の学内 LAN での先進的なサービス事例・IC カードを利用した共用端末の安全な利用方法、名古屋工業大学での IC カードの導入事例などが紹介されました。本報告会には、学内外から約50名の教員・事務職員・技術職員が参加し、活発

な質疑応答が行われました。また、報告会後の懇親会では各大学での情報基盤運用担当者間で、日本・東海地区・学内の学術ネットワークに関する幅広い意見交換が行われました。同報告会は11月30日(金)に附属図書館で第5回が、12月中旬に情報連携基盤センターで第6回が行われる予定です。



# 農学国際教育協力研究センターが第7回～第9回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター



第7回オープンセミナーでプロジェクトについて説明する小國氏

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、10月11日（木）、第7回オープンセミナーを開催し、小國和子日本福祉大学講師が「カンボジアにおける持続的な農村社会開発に向けた技術協力とは～バタンバン農業生産性強化計画における取組より～」の標題で講演しました。同講師は、バタンバン農業生産性強化計画のJICA 長期派遣専門家として、灌漑水利組織の活性化、農村女性グループの組織化、女性グループによる農産加工、女性リーダーの育成に取り組み、日本の農村の開発経験である農業普及および生活改善普及の手法を活かし、住民の自発的な参加意識を喚起した経験について報告しました。本セミナーは女性の出席者が多かったのが特徴でした。

第8回オープンセミナーは11月13日（火）に開催され、バイオヴァーシティ・インターナショナル兼ケニア国立博物館研究員でICCAE 客員研究員のパトリック・マウンドゥ氏が「作物遺伝資源とその利用にまつわる伝統知識の保全および農民の生活向上への利用：ケニア、キツイ県における事例」について講演しました。野生種と栽培種を含む多くの伝統食用作物には高い栄養価が認められるのにも関わらず十分に利用されていないことが報告され、低利用作物遺伝資源の生息地域内保全や地方品種の育種資源としての活用、野生有用植物の栽培化などについて活発な議論が行われました。

引き続き、11月16日（金）、第9回オープンセミナーをアルバロ・アマヤ コロンビア・サトウキビ研究センター所長を迎え、開催しました。「熱帯における砂糖とエタノール生産のためのサトウキビ栽培技術について」と題して、現在世界的に注目されているサトウキビからのバイオエタノールの生産とその経済性、他作物に対する抜群の優位性（EPR：8以上、トウモロコシは1.6）、将来性等について講演があり、学外からの出席者も加わり、活発な議論が行われました。



第8回オープンセミナーで伝統野菜について説明するマウンドゥ氏



第9回オープンセミナーで熱心に質問に答えるアマヤ氏

## 地球教室「河原の石で石包丁を作ろう」を開催

●博物館

博物館は、10月20日(土)、21日(日)の両日、地球教室「河原の石で石包丁を作ろう」を開催しました。このイベントは、小学3年生～中学3年生とその保護者を対象として行われ、60名もの応募者から抽選により24名が参加しました。

初日は本学博物館で、2時間ほどの「石の種類」に関する学習を行い、2日目は岐阜県各務原市鵜沼の木曾川河原

へ行き、前日の学習をもとに「石包丁作りに適した石ころ」を参加者自身が探しました。見事な秋晴れの中、鵜沼の河原では、親子であれこれと議論しながら石を拾い集める姿が見られました。

その後、自分たちで拾った石ころを使って石包丁を作り、それで肉や野菜を切ってチキンカレーラーメンを作りました。一緒に悪戦苦闘しながら肉を切る親子や、上手に切る

コツを子供に教える親、石器の出来映えが悪く全く切れずに途方に暮れる親子など、様々なケースが見られましたが、「親子で体験を共有する」非常に良い機会となりました。

博物館では今後もこのような、親子を対象とした自然体験教室を実施する予定です。



石包丁を作る参加者



カレーラーメンを美味しく食べる参加者

## 秋の野外実習「ドングリからさぐる 古代の知恵・自然の知恵」を開催

●博物館

博物館は、11月10日(土)、野外観察園において「ドングリからさぐる 古代の知恵・自然の知恵」を開催しました。ドングリの自然史や古代の人々とドングリの関わりを体験しながら学ぶこの実習に、今年も23名の学生や一般市民が参加し、秋の一日、ドングリと向かい合いました。

午前中は林のドングリを拾いながら、その生活史を学び

ました。ドングリの仲間には、成り年に1万を越える実をつける木があること、しかし、その実の殆どが親木になるまで生き残らないことなどを聞いて、参加者は自然の厳しさやドングリの知恵に驚いた様子でした。

午後からは、縄文人が食べていたクリの団子を作りました。実際の遺跡から出土した石器を使って、乾燥したクリを砕いて粉にしたあと、ひき肉や卵を混ぜて団子状にして茹でました。縄文時代には調味料が殆どなかったため、出来上がった団子は素材の味そのものでしたが、参加者は「意外においしい」と感心しつつ試食していました。



ドングリの説明を聞く参加者

## 「アジア憲法フォーラム2007」を開催

●大学院法学研究科、法政国際教育協力研究センター

大学院法学研究科および法政国際教育協力研究センターは、9月22日(土)、23日(日)に「アジア憲法フォーラム2007」を開催(共催:同フォーラム実行委員会(鮎京正訓実行委員長))しました。

同フォーラムは、2005年9月にソウル大学校法科大学及び韓国法制研究院の主催により開催された「アジア憲法フォーラム」を引き継ぎ、「21世紀の憲法変動とアジアの立憲主義」をテーマとして開催され、井上達夫東京大学教授による基調講演、成 樂寅ソウル大学校法科大学教授およびサルバドール・T・カルロタ フィリピン大学法学部

長による記念講演に続いて、「法の支配・法治とアジア」、「憲法裁判とアジア」、「人権保障とアジア」、「憲法変動とアジア」の4つの分科会が開かれ、16カ国から報告者が出席し、これ以外に100名を超える国内外からの参加者を迎えて、活発な議論が展開されました。

いま、アジア諸国の憲法は、グローバル化のもとで大きな変動を余儀なくされ、各国の掲げてきた憲法原理が、様々な試練のもとにおかれています。このようなアジア諸国をめぐる憲法変動に対し、アジアの憲法研究者が定期的一堂に会し、各国の憲法で何が問題となっているか、そしてそれをどのように考えるのか、について相互に討論することは、アジアの平和、安定と繁栄を築き上げる上できわめて重要なことであると言えます。

今回の「アジア憲法フォーラム」は2009年に台湾で開催予定であり、アジア全体の憲法問題を議論するフォーラムとして今後も発展していくことが期待されます。



実行委員長のあいさつ



集合写真

## 文部科学省特別教育研究経費 物質合成研究拠点機関連携事業 第2回若手フォーラムを開催

●物質科学国際研究センター

11月2日(金)、3日(土)の2日間、野依記念物質科学研究館において、京都大学・名古屋大学・九州大学の若手研究者が集結し、物質合成研究拠点機関連携事業の第2回若手フォーラムが開催されました。

同フォーラムは、三大学連携事業のメリットを最大限に活用し、若手研究者が大学や専門の垣根を越え、研究につ

いてディスカッションする場を提供するものです。前年度の京都大学での開催からさらにステップアップして、今回の若手フォーラムでは、メンバー間の共同研究についての進捗状況の報告や新しい研究の提案などが中心となり、熱心なディスカッションが繰り広げられました。オブザーバーとして参加した異 物質科学国際研究センター長からも、若手の中から生まれるフレッシュで斬新な研究を期待する声が研究者達にかけられました。



参加者の集合写真

## ごみ減量化の取り組みについて

平成12年3月に本学は、全国の大学に先駆けて「ごみ減量化宣言」をしました。宣言文は『名古屋大学の構成員は、教育研究活動の結果排出される一般廃棄物（ごみ）の発生を抑制するとともに、分別回収を行い、その再使用、再利用に努め、廃棄物の資源化、減量化を促進することは大学としての社会的責任であることと自覚し、全学一元化方式による分別回収・処理を推進します。』というものです。

この取り組みを始めるきっかけの一つは、平成11年2月に名古屋市が「ごみ非常事態宣言」をしたことです。名古屋市は、ごみの廃棄場所として一時、名古屋港の臨海工業地帯の一角にある藤前干潟をごみ埋立地とする計画を立てていました。そこは日本最大級の渡り鳥の飛来地としても知られていたことから、環境破壊であると話題になり計画は頓挫しました。そのため名古屋市は、ごみ減量化に本格的に取り組む始めました。名古屋市の人口は約220万人で、本学の構成員は、2万人を越えます。すなわち名古屋市全体のおよそ1%に相当することから、本学がごみ減量化に率先して取り組む必要性と意義がありました。

そこで「ごみ減量化宣言」を具体化するために「ごみ減量化プロジェクトチーム」を立ち上げ、18名のメンバーで知恵を出し合いました。以下に、これまでの主な取り組みを紹介します。

まず、教職員には「名古屋大学ごみガイド」を配付し、学生にはごみ分別クリアファイル（日本語、英語、中国語）を配付してごみの分別と減量化への協力を呼びかけました。

大学の指定ごみ袋は、5種類（可燃ごみ、不燃ごみ、かん、びん、ペットボトル）を作成し有料化しました。コストを意識し減量化につなげることが出来るからです。また、ごみの分別を20種類とし、資源化できるごみ（かん、びん、ペットボトル、発泡スチロール、蛍光管、電池）の回収処理費用を抑えたルートを確保しました。

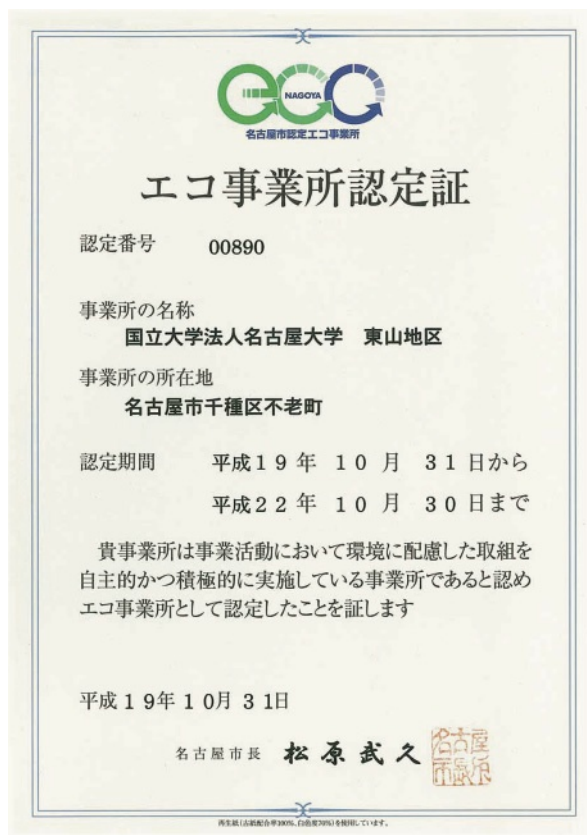
次に本学のごみで最も多い紙ごみを資源化しました。本学から排出される紙ごみ300トンの約7割を本学で年間使用する17万5千個のトイレットペーパーに再生しています。学内の事務室・研究室に備え付けた「学内リサイクル古紙回収袋」を回収し、本部横の古紙中間処理施設の大型シュレッダーで粉砕した後、製紙会社でそれを原料にトイレットペーパーを製造しています。

こうした取り組みの結果、平成14年度のごみの処分量は、対前年度比では可燃が13%減少し、不燃が50%減少しました。

また、学内に環境指導員8名（ごみパトロール隊）を配置し、東山キャンパスに45カ所ある指定集積場のごみ袋を点検しています。ごみ袋に可燃物、不燃物が混在していることがあるため、ごみ袋を開けてやり直し作業にあたっています。これまでに環境指導員の努力もあり、名古屋市から優良事業所の指定を受けています。

さらに、今年10月には新たに、これまでの活動の評価をもとに名古屋市からエコ事業所の認定を受けました。

今後とも学内外のご理解を得て、さらなるごみ減量化の取り組みを進めいく予定です。



本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
1 濱口道成・医学系研究科長らの研究グループが、治療が難しい胆管がんの新たな遺伝子治療法を発表	10.16 (火)	中日 (朝刊) 日刊工業
2 第66回日本癌学会学術総会3～5日開催：濱嶋信之・医学系研究科教授は、リスク遺伝子が日本人など東アジア人に多いという疫学調査結果を発表	10.16 (火)	毎日 (朝刊)
3 名大サロンの主役：茂登山清文・情報科学研究科准教授 アートの公共性探る	10.16 (火)	中日 (朝刊)
4 愛知県医師会健康教育講座「身近に起こる心の病～不眠・うつ・認知症について」：尾崎紀夫・医学系研究科教授	10.16 (火)	読売
5 商品先物取引の機能と役割から考える 家森信善・経済学研究科教授	10.16 (火)	日刊工業
6 梶田正己・元本学教育学部長が次期愛知県教育委員長に選任される	10.16 (火) 10.17 (水)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
7 西尾市と幡豆郡3町の合併 後 房雄・法学研究科教授は「将来を見据えた施策が打てなければ、合併の意味はない」と指摘	10.16 (火)	中日 (朝刊)
8 本学、浜松医科大学、名城大学が共同申請した「がんプロフェッショナル養成プラン」 岡田邦輔・名城大学薬学部長は、「これまで1ヶ月だった実務実習を5ヶ月に延長し、さらに本学医学部附属病院などの連携病院で6ヶ月余の臨床研修を予定」と話す	10.16 (火)	読売
9 医学部附属病院で骨髄移植を受け今も入院中の太田佑弥君が、病床で作り続けた川柳や詩「夢は広がる どこまでも」を自費出版	10.16 (火)	中日 (朝刊)
10 MECT2007・メカトロテックジャパン2007 17～20日開催：高井治・エコトピア科学研究所教授 「プラズマを用いた表面技術とその応用」、石川孝司・工学研究科教授 「ものづくり基盤技術の高度化を目指す塑性加工」、社本英二・工学研究科教授 「切削加工における振動の抑制と利用～びびりの振動の抑制、及び振動を利用する楕円振動切削技術を紹介～」	10.16 (火) 10.17 (水)	中日 (朝刊) 日刊工業
11 数理ウェブ27日開催	10.16 (火)	中日 (朝刊)
12 ラジオ「小島一宏モーニングアイランド」吉田俊和・教育発達科学研究科副研究科長が出演	10.16 (火)	読売
13 環境テクシス社長・高橋慶氏・本学卒業生は、食品工場から出る汚泥を基に環境に優しい肥料を作る	10.16 (火)	読売
14 College mode：丹羽亜衣さん・本学大学院生 「青春18きっぷ」で日帰り小旅行を楽しむ	10.16 (火)	中日 (朝刊)
15 奨学金を受ける大学生らが「あしなが学生募金」への協力を呼びかける 同募金東海局次長の宮本尚一郎さん・本学学生は「皆さんの力で本当に人生が変わる学生がいる」と訴えた	10.16 (火)	中日 (朝刊)
16 街角ニュース：留学生向けバザー20日開催	10.16 (火)	中日 (朝刊)
17 口遊録：本学 産学連携の強化に向け、アメリカ・ノースカロライナ州に現地事務所を開設 商務長官のジェームス・フェイン氏は「どんな成果があがるかわくわくしている」と話す	10.17 (水)	中日 (朝刊)
18 中国語で中国を知る談話クラス20日開催：秦 明吾・国際言語文化研究科教授 「贈答慣行に見る中日のちがひ」	10.17 (水)	中日 (朝刊)
19 教育ルネサンス：福井和花さん・本学学生が、本学のアメリカンフットボール部「グランパス」の、選手と選手を支えるスタッフ部員を取材	10.17 (水)	読売
20 名古屋手紙の会10月例会24日開催：塩村耕・文学研究科教授	10.17 (水)	中日 (夕刊)
21 股関節教室21日開催	10.18 (木)	中日 (朝刊)
22 タイのチュラポーン王女が交流協定締結を記念し視察	10.18 (木)	毎日 (朝刊) 他2社
23 第5回「名古屋大学東京フォーラム」19日開催 テーマは「アジアに繋ぐ架け橋」	10.18 (木) 10.23 (火) 10.26 (金)	中日 (朝刊) 読売
24 老年学：愛知淑徳大学教授・井口昭久・本学名誉教授 あと数年で超高齢化社会	10.18 (木)	朝日 (朝刊)
25 子供でも発症する突発性難聴 中島務・医学系研究科教授は「早期治療が不可欠で、4週間放置すると回復が期待できなくなる」と話す	10.19 (金)	中日 (朝刊)
26 医学部附属病院の研修生は募集定員の75.0%に留まる	10.19 (金)	中日 (朝刊)
27 叙位叙勲：北澤正啓・本学名誉教授	10.20 (土)	読売
28 愛知地方最低賃金審議会(会長・皆川正・経済学研究科教授)は、鉄鋼など8業種の産業別最低賃金を10-15円引き上げるよう愛知労働局長に答申	10.20 (土)	中日 (朝刊)
29 静岡県立美術館館長・宮治昭・本学名誉教授 仏像の出現—その意味～ガンダーラ仏の誕生～	10.21 (日)	中日 (朝刊)
30 中部大学に来春「現代教育学部」が開設 新学部について中部大学学長・山下興亜・元本学副総長と現代教育学部長就任予定の豊田ひさき・元本学教育発達科学研究科教授が語る	10.21 (日)	読売
31 「伸ばそう！ 小中学生の国語力」開催 田村加代子・文学研究科准教授	10.21 (日)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
32 闘牛について学術的に考察するシンポジウムが鹿児島大学で開催 石川菜央・環境学研究科研究員は「新潟ではすべて引き分けるが、徳之島では必ず勝ち負けを決める」と闘牛で追求するものの違いを指摘	10.21 (日)	日経 (朝刊)
33 医療と健康：低身長 治療について 川村小児科院長・川村正彦氏・本学卒業生	10.22 (月)	中日 (朝刊)
34 第25回全日本大学女子駅伝 本学初出場	10.22 (月) 10.23 (火) 10.25 (木) 10.26 (金)	読売
35 新聞配達に携わる人々への表彰式が中日新聞社で21日開催 馬場明日香さん・本学学生が知事賞受賞	10.22 (月)	中日 (朝刊)
36 「若者のライフスタイル in Nagoya」20日開催	10.22 (月)	中日 (朝刊)
37 本学、理化学研究所、近畿大学の研究チームは、真夜中に強い光を浴びて体内時計が一時的に止まって見えるのは、個々の細胞のリズムがバラバラになるのが原因であることを、マウスの実験で突き止める	10.22 (月)	日経 (夕刊) 中日 (夕刊)
38 全国学力調査どう見る 中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授	10.23 (火)	朝日 (朝刊)
39 新エネルギー・産業技術総合開発機構の「鉄鋼材料の革新的高強度・高機能化基板研究開発」(リーダー・宮田隆司・本学副総長)と大阪大学は、高機能鋼材などに対応する溶接技術の産学連携プロジェクトを進める	10.23 (火)	日刊工業
40 76歳で文学研究科の博士号を取得した森井敏晴氏	10.24 (水)	中日 (朝刊) 他2社
41 下水管の位置をめぐり本学教授が隣人を提訴	10.24 (水) 10.25 (木)	中日 (朝刊)
42 医療福祉タウン研究会 3周年・記念講演会25日開催：中京大学総合政策学部長・奥野信宏・元本学副総長	10.24 (水)	中日 (朝刊)
43 石原一彰・工学研究科教授が「日本 IBM 科学賞」受賞【化学分野】「酸・塩基複合型高機能触媒の設計と低環境負荷型精密有機合成反応の開拓」	10.25 (木)	日刊工業
44 全国学力テスト 植田健男・教育発達科学研究科教授は「貧富の差が学力に反映されており、結果は予想通り。教育に留まらず安心して生活できる環境づくりが重要」と話す	10.25 (木)	中日 (朝刊)
45 名古屋大学星の会・天文学講演会2007 28日開催：福井康雄・理学研究科教授「太陽はなぜ輝くのだろう」	10.25 (木)	中日 (朝刊)
46 読売講座：本学で読売新聞社監査委員の笹島雅彦氏が「日本の安全・アジアの安全」をテーマに講義	10.25 (木)	読売
47 本学、東京大学、京都大学など旧帝国大学と早稲田大学、慶應義塾大学と合同で全国大学説明会を開催 入試課では「入学者の8割が東海北陸地域の出身者。他の地区にアピールするいい機会」と話す	10.25 (木)	朝日 (朝刊)
48 第39回中日教育賞贈呈式25日開催：来賓の吉田俊和・教育発達科学研究科副研究科長は、「受賞を励みに、中部をはじめ日本の教育を先導してほしい」と祝辞を贈る	10.25 (木)	中日 (夕刊)
49 医学部附属病院医師が73人分の個人情報記録した USB メモリー盗難	10.25 (木) 10.26 (金)	毎日 (夕刊) 中日 (朝刊) 他3社
50 本学が開発した解析用の超高速飛跡読み取り装置を使用し、ニュートリノの国際共同実験が本格的に開始	10.26 (金)	朝日 (朝刊)
51 書籍：「源氏物語の詩学—かな物語の生成と心的遠近法」 高橋亨・文学研究科教授著	10.26 (金)	中日 (朝刊)
52 中越沖地震 東京電力の再調査に続き、中国、四国、九州電力が進める活断層の追加調査に対し、鈴木康弘・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授は、「80年代当時の知見でも断層の存在は分かっていたはずで、仮に今回の調査で活断層の存在がはっきりしたとしても、以前の調査で想定できたかどうかを検討する必要がある」と指摘する	10.26 (金)	朝日 (朝刊)
53 国史跡白鳥塚古墳・志段味大塚古墳をめぐり歴史風景17日名古屋市博物館で開催：吉田英一・博物館准教授らが講演	10.26 (金)	中日 (朝刊)
54 この人：榑崎彰一・本学名誉教授に師事した愛知県陶磁資料館学芸課長・井上喜久男氏・本学卒業生が小山富士夫賞を受賞	10.26 (金)	中日 (朝刊)
55 風向計：共立総合研究所主席研究員・江口忍氏・本学卒業生 公立高 見逃せぬ地域格差	10.26 (金)	読売
56 記者たちの現場：本学の派遣医師の引き上げに伴い、知多市民病院の産科休診へ	10.26 (金)	中日 (朝刊)
57 故・西條八束・本学名誉教授 長良川河口堰、中部国際空港建設に警鐘	10.26 (金)	朝日 (夕刊)
58 文化勲章 コロンビア大学名誉教授・中西香爾氏・本学卒業生	10.27 (土)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊) 朝日 (朝刊) 読売
59 地球温暖化による危機回避の出発点28日開催：森嘉昭夫・本学名誉教授	10.27 (土)	中日 (朝刊)
60 訃報：坂本信夫・本学名誉教授	10.27 (土)	中日 (朝刊) 読売

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
61 全日本大学駅伝 中村高洋さん・本学大学院生は「3大駅伝はこれまで成績が悪いので、最後に1ヶ台で走って地元を沸かせたい」と話す	10.27 (土)	朝日 (夕刊)
62 全日本大学女子駅伝28日開催 初出場は無念の繰り上げスタートに終わる	10.29 (月)	読売
63 「2007愛知の高校教育白書」発行 植田健男・教育発達科学研究科教授は、「複合選抜入試制度などの競争的なシステムを取ってきた愛知県の特性が結果に表れている」と話す	10.29 (月)	中日 (朝刊)
64 おしごとファイル：名古屋市科学館学芸員 (プラネタリウム解説者)・小林修二氏・本学卒業生 見学者に満足してもらえれば最高	10.29 (月)	中日 (朝刊)
65 本学が主幹校となり全国の法科大学院20校と、実務技能教育を目的とした教材を共同開発	10.30 (火)	中日 (朝刊)
66 第16回鉄道シンポジウム29日開催：中京大学総合政策学部長・奥野信宏・元本学副総長	10.30 (火)	中日 (朝刊)
67 2007年度あいち男女共同参画社会推進・産学官連携フォーラムシンポジウム11月13日開催	10.30 (火)	中日 (朝刊)
68 学生街ダンス：猪子雅和さん・本学大学院生 名古屋に学生街を創る	10.30 (火)	中日 (朝刊)
69 医師不足で崩壊の危機にある東海市市民病院を守るため、医師を派遣する本学、東海市、愛知県名古屋市医師会などが参加して協議会を開催 市議会に公立、民間の病院統合案の理解を求める	10.31 (水)	中日 (朝刊)
70 愛知大学副学長・堀 彰三氏・本学卒業生が愛知大学新学長に選任される	11. 8 (木)	中日 (朝刊)
71 この人に聞きたい：本学で講義をした理美容師の赤木勝幸氏	10.31 (水)	読売
72 社団法人中部経済連合会などが後援する「第11回伊勢湾・三河湾を考える会」29日開催：コーディネーターは科学技術交流財団理事長・松尾稔・元本学総長	10.31 (水)	朝日 (朝刊)
73 近藤孝男・理学研究科長らが体内時計の周期を安定に保つ仕組みを解明	11. 1 (木)	中日 (朝刊)
74 東京商工会議所の専務理事に、財団法人地球産業文化研究所理事・中村利雄氏・本学卒業生が就任	11. 2 (金)	朝日 (朝刊)
75 朝日カルチャーセンター：福井康雄・理学研究科教授 「おどろき」の宇宙へここまで見えてきた、最新宇宙像	11. 2 (金)	中日 (夕刊)
76 若松佑子・生物機能開発利用研究センター教授らの研究グループが、メダカの体細胞を使ったクローン作りに成功	11. 2 (金)	日刊工業
77 風向計：家森信善・経済学研究科教授 金融機関の「責任共有」に期待	11. 3 (土)	読売
78 平成18年秋の叙勲：瑞宝中綬章を青木國雄・本学名誉教授、横山昭・本学名誉教授、齋藤隆夫・本学名誉教授、瑞宝双光章を浅井正樹・元本学医学部附属病院医療技術部長、瑞宝単光章を花木玲子・元医学部附属病院副看護部長が受賞	11. 3 (土)	読売
79 第1回ジャパンレディースレガッタ4日開催	11. 3 (土)	中日 (朝刊)
80 「伸ばそう！小中学生の国語力」講演会・シンポジウム19日開催：加地伸行・元本学助教授	11. 3 (土)	中日 (朝刊)
81 100Answers：Q1「悪役という存在に関心がありますか」に対し、坪井秀人・文学研究科教授は「これだけ歪んだ悪があふれていると、悪役を待望する気持ちにはなれない」と話す	11. 4 (日)	朝日 (朝刊)
82 訃報：杉山幸男・本学名誉教授	11. 4 (日)	中日 (朝刊)
83 なごや自死遺族支援官民合同シンポジウム4日開催：蔭山英順・本学名誉教授	11. 4 (日)	他3社
84 和式馬術部が木曾馬で流鏑馬を披露	11. 5 (月)	中日 (朝刊)
85 ミュー型ニュートリノの飛跡を7例確認 実験に加わる丹羽公雄・理学研究科教授は、「技術的に検出可能を確認でき、タウ型の検出も時間の問題。見つければ、スーパーカミオカンデ実験がノーベル賞を受賞するのにも有利になる」と話す	11. 5 (月)	読売
86 疑問だらけの大連立：後 房雄・法学研究科教授	11. 6 (火)	中日 (朝刊)
87 College mode：高木賢治さん・本学大学院生 問われる“テロとの戦い” 映画「マイティ・ハート／愛と絆」	11. 6 (火)	朝日 (朝刊)
88 「エコキャンパスフェスティバル」中京大学で2日開催：丹羽亜衣さん・本学大学院生	11. 6 (火)	中日 (朝刊)
89 竹内恒夫・環境学研究科教授の研究室の院生ら3人が、保管期限の切れた撤去自転車を修繕し、決められた駐輪場間を誰でも使用できる、「名チャリプロジェクト」を12月に2週間実施	11. 6 (火)	日経 (夕刊)
90 時のおもり：総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授 技術の進歩に置いてきぼり	11. 7 (水)	中日 (朝刊)
91 名古屋市裏金問題 市橋克哉・法学研究科副研究科長ら5人で構成される外部調査委が、調査・検証し再発防止策に提言	11. 7 (水)	中日 (夕刊)
92 書籍：「般若心経と生きる」 総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授ら著	11. 7 (水)	中日 (朝刊)
93 ベストセラーの裏側：「環境問題はなぜウソがまかり通るのか」 武田邦彦・元本学教授著	11. 8 (木)	中日 (朝刊)
94 第2回モノづくり連携大賞：本学など「細胞シート移植工学の創出と展開」で特別賞受賞	11. 8 (木)	日経 (朝刊)
95 第2回モノづくり連携大賞：本学など「細胞シート移植工学の創出と展開」で特別賞受賞	11. 9 (金)	日刊工業

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
95 東海地方 10月の地震：林 能成・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助教	11. 9 (金)	読売
96 国土形成計画シンポジウム27日開催：森川高行・環境学研究科教授	11. 9 (金)	中日 (朝刊)
97 「公務員」ということ：川合豊彦氏・本学卒業生 キャリア官僚も悩む	11. 9 (金)	朝日 (朝刊)
98 文化 土曜訪問：経済学者・宮本憲一氏・本学卒業生 環境自治権の確立を訴える	11.10 (土)	中日 (夕刊)
99 風向計：フォーイン副社長・久保鉄男氏・本学卒業生 お国柄映す自動車安全技術	11.10 (土)	読売
100 中日新聞を読んで：中西久枝・国際開発研究科教授 ノラからヒラリーへ	11.11 (日)	中日 (朝刊)
101 日本臨床腫瘍学会第2回市民公開講座 がん薬物療法の今：安藤雄一・医学部附属病院准教授	11.11 (日)	朝日 (朝刊)
102 From 60：産学官連携推進本部 国際連携部 国際リサーチマネージャー・青山公三氏・本学卒業生 名大を世界に売り込む	11.11 (日)	毎日 (朝刊)
103 本学キャンパス内の森で家族連れが“秘密基地”づくりに挑戦 千種区と子ども建築研究会主催	11.11 (日)	中日 (朝刊)
104 本学と名古屋工業大学が、「インテリジェント手術機器研究開発プロジェクト」で、脳神経外科用の医療機械の共同開発を開始	11.13 (火) 11.14 (水) 11.16 (金)	日経 (朝刊) 読売 日刊工業 中日 (朝刊)
105 名大サロンの主役：鷺谷威・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター准教授 動く大地、GPS 監視	11.13 (火)	中日 (朝刊)
106 第1回日中環境シンポジウム「南水北調 中国の経済発展と水資源の政策的・技術的課題」15日開催	11.13 (火)	中日 (朝刊)
107 危機に立つジャーナリズムー報道被害を考える24日開催：春名幹男・国際言語文化研究科教授	11.13 (火)	中日 (朝刊)
108 本学学生が「ハンガリー動乱」を扱った映画「君の涙ドナウに流れ ハンガリー1956」の試写会と座談会に参加	11.13 (火)	中日 (朝刊)
109 本学 文部科学省の選考「世界トップレベル研究拠点プログラム」に今回惜しくも落選	11.14 (水)	読売
110 14日は国際連合が定めた「世界糖尿病デー」：国際糖尿病連合 副会長・堀田饒・本学名誉教授	11.14 (水)	毎日 (朝刊)
111 第14回名古屋大学理学懇話会「ナノの世界のものづくり」17日開催	11.14 (水)	中日 (朝刊)
112 日本の財政・税制の現状と課題13日開催：秋山和美・名古屋国税局長が講演	11.14 (水)	中日 (朝刊)
113 本学他、愛知県内の留学生40人が生活する「NGK インターナショナルハウス」では、寮生による国際色豊かな講座で地域住民との交流広がる	11.14 (水)	中日 (朝刊)
114 中部の教育：名古屋学院大学准教授・水野晶夫氏・本学卒業生 地域貢献で成長する学生	11.14 (水)	読売
115 ボージョレ・ヌーボー解禁の盛り上がり株価に好影響か 人の心理の株価への影響を日本のデータで立証した加藤英明・経済学研究科教授は「従来の合理性を前提にした理論とは別の考え方が出てきた」と話す	11.14 (水)	日経 (夕刊)
116 今井常夫・医学部附属病院講師と中部大学の研究グループは、乳がんの細胞を温めて消滅させる治療法を開発	11.15 (木)	日刊工業
117 森川高行・環境学研究科教授を中心に、二酸化炭素削減など環境問題解決目的で、高度道路交通システム (ITS) の実証実験を行う	11.15 (木)	読売
118 私の視点：山田健太郎・環境学研究科教授 橋の安全 新設より維持管理に予算を	11.15 (木)	朝日 (朝刊)
119 岡田保・本学名誉教授が東海テレビ文化賞受賞	11.15 (木)	中日 (朝刊)
120 日本精神障害者リハビリテーション学会第15回名古屋大会21、22日開催：尾崎紀夫・医学系研究科教授	11.15 (木)	中日 (朝刊)
121 老年学：愛知淑徳大学教授・井口昭久・本学名誉教授 互いの皺 愛情確かめて	11.15 (木)	朝日 (朝刊)
122 イスマンジェイ社長・渡邊敏幸氏・本学卒業生 「65歳の起業家」の挑戦	11.15 (木)	日刊工業
123 訃報：小穴進也・本学名誉教授	11.14 (水) 11.15 (木)	中日 (夕刊) 日経 (朝刊) 他3社
124 ガンダーラ美術とバーミヤーン26日開催：静岡県立美術館館長・宮治昭・本学名誉教授	11.15 (木)	中日 (夕刊)



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

12月15日(土)

場 所：環境総合館 1階  
レクチャーホール  
(あわせてホールにて展示、  
1階ラボと4階「地域防災  
交流ホール」を開放)

第9回まちとすまいの集い

テ ー マ：「地球温暖化と都市・建築」  
主 催：環境学研究科都市環境学専攻建築学教室



[問い合わせ先]

環境学研究科  
清水裕之教授 052-789-3745

12月17日(月)

場 所：野依学術記念交流館  
時 間：16:30~18:00  
入 場 料：無料

化学系セミナー

「分子プログラミングへの挑戦」

相田卓三 東京大学大学院工学研究科化学生命工学専攻教授

[問い合わせ先]

物質科学国際研究センター  
高木秀夫 052-789-5473

12月19日(水)

場 所：野依記念学術交流館  
カンファレンスホール  
時 間：14:00~17:00  
入 場 料：無料

第7回名古屋大学遺伝子実験施設公開セミナー

「生物学と化学と工学がおりなす生命科学の新たな展開」

「生きた細胞と生物個体内の生体分子イメージング」  
小澤岳昌 東京大学大学院理学系研究科化学専攻教授  
「セントラルドグマの合成生物学—人工塩基対の創製」  
平尾一郎 理化学研究所ゲノム科学総合研究センター・  
核酸合成生物学研究チーム・チームリーダー



[問い合わせ先]

遺伝子実験施設  
杉田 護 052-789-3080

12月20日(木)

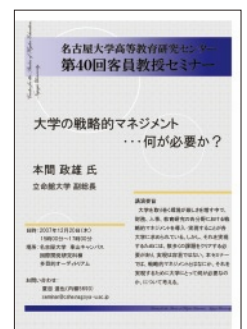
場 所：国際開発研究科棟  
多目的オーデトリウム  
時 間：15:00~17:00

高等教育研究センター

第40回客員教授セミナー

「大学の戦略的マネジメント…何が必要か？」

本間政雄 立命館大学副総長



[問い合わせ先]

高等教育研究センター事務局  
052-789-5696

12月21日(金)

場 所：多元数理科学研究科・  
理学部1号館  
時 間：13:30~17:00

多元数理科学研究科・企業研究セミナー

[問い合わせ先]

多元数理科学研究科  
宇澤達教授 052-789-2461

12月21日(金)

場 所：多元数理科学研究科・  
理学部1号館  
時 間：17:30~19:30

数学教室ミ二同窓会

[問い合わせ先]

多元数理科学研究科長 金銅誠之教授  
052-789-2815

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

12月22日(土)、1月12日(土)、  
2月2日(土)

「ミクロの探検隊～電子顕微鏡を使ってみよう～」

場 所：医学部医学教育研究支援センター  
超微形態室

時 間：13:00～16:00

定 員：各10名

対 象：小学5年生以上

参 加 費：100円（保険料）

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

12月26日(水)

社会と科学

場 所：野依記念物質科学研究館  
二階講演室

「生命科学における open source への取り組みーデータベース等リソース開発及びその提供ー」

時 間：10:30～12:00

森 浩禎 奈良先端科学技術大学院大学教授

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

理学研究科物質理学専攻（化学系）

小谷 明 052-789-2954

1月10日(木)

第36回防災アカデミー

場 所：環境総合館 1階  
レクチャーホール

講演タイトル：ひずみ集中帯～内陸大地震の謎を解き明かす鍵？～

時 間：18:00～19:30

講 演 者：鷺谷 威（環境学研究科准教授）

入 場 料：無料

※どなたでもご自由に聴講できます。

[問い合わせ先]

災害対策室 052-788-6038

taisaku@seis.nagoya-u.ac.jp

<http://anshin.seis.nagoya-u.ac.jp/taisaku/>



1月12日(土)

名古屋大学オープンカレッジ「自由奔放！サイエンス」

場 所：経済学研究科・  
カンファレンスホール

講演内容：「東アジアの地域統合とその制度化」

時 間：10:00～12:00

講 演 者：平川 均（本学経済学研究科）

[問い合わせ先]

経済学研究科エクステンション・サービス

Fax:052-788-6197

URL: <http://www-oc.soec.nagoya-u.ac.jp/>

E-mail: [ecoextender@soec.nagoya-u.ac.jp](mailto:ecoextender@soec.nagoya-u.ac.jp)

1月22日(火)

第18回高等研究院セミナー

場 所：高等総合研究館 6階  
カンファレンスホール

講演内容：①未定

②科学者の不正行為ーその背景と防止策ー

時 間：17:00～

講 演 者：①門松健治医学系研究科教授

入 場 料：無料

②山崎茂明愛知淑徳大学文学部図書館情学科教授

[問い合わせ先]

研究協力・国際部 研究支援課

高等研究院掛 052-788-6051、6153

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

## 1月30日(水)

場 所：総合保健体育科学センター  
会議室  
時 間：16:30～  
入 場 料：無料

## コロキウム

講演内容：「大学体育必修の根拠を探る」  
講 演 者：出原泰明（本学総合保健体育科学センター）

[問い合わせ先]

総合保健体育科学センター  
小川豊昭 052-789-5836

## 2月2日(土)

場 所：あいち国際プラザ8階大会議室  
時 間：12:45～

## 小中学校教員、日本語ボランティア現職者研修会

[問い合わせ先]

留学生センター  
浮葉准教授 052-789-5771

## 2月18日(月)

場 所：環境総合館1階  
レクチャーホール  
時 間：18:00～19:30  
入 場 料：無料

## 第37回防災アカデミー

講演タイトル：「スマトラ津波と復興～私が災害研究に惹かれたわけ～（仮題）」  
講 演 者：高橋 誠（環境学研究科准教授）  
※どなたでもご自由に聴講できます。

[問い合わせ先]

災害対策室 052-788-6038  
taisaku@seis.nagoya-u.ac.jp  
<http://anshin.seis.nagoya-u.ac.jp/taisaku/>

## 3月7日(金)

場 所：野依記念学術交流館  
時 間：10:00～16:00  
入 場 料：無料

## デジタルレファレンス・フォーラム

内 容：(1) 講演会  
(2) 交流会  
(3) ワークショップ

[問い合わせ先]

附属図書館庶務掛 052-789-3667

## 【訂正とお詫び】

名大トピックス No.174号（2007年11月発行）の16ページに誤りがありましたので、深くお詫び申し上げますとともに、下記のとおり訂正させていただきます。申し訳ありませんでした。

16ページ 下段 写真キャプション右下

〔誤〕 講演をする塩野谷名誉教授

〔正〕 講演をする高橋名誉教授

名大トピックス No.175 平成19年12月17日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail [kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp](mailto:kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp)

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

（<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>）でもご覧いただけます。

表紙

熱田神宮千秋閣でのお茶会  
（茶道部）  
（平成19年11月25日）



## 68 自校史教育 一名大の歴史をたどる

2007(平成19)年度現在、名古屋大学では全学教育科目(全学教養科目)として、新入学生を主な対象とした前期授業「名大の歴史をたどる」を開講しています。学生に対して自らの大学の歴史を講義するタイプの授業は「自校史教育」と呼ばれ、国内では10年ほど前から一部の私立大学で試行的な取り組みがなされていました。私立大学では多くの場合、いわゆる「建学の精神」に基づくアイデンティティの追究が不断に求められる過程で自校史が常に意識される傾向が強いことから、こうしたタイプの授業が行われるようになったと思われます。

本学における自校史教育は、1999年度に大学史資料室(大学文書資料室の前身)によって始められました。当時は2年生を対象とした「日本の大学—近代日本と名古屋大学—」という講義名で開講されており、初年度の受講生はわずか12名でした。その後、この講義名は2003年度に「名大の歴史をたどる」と改められ、2004年度からは平野総長による「総長講義」(1コマ分)が組み込まれ、さらに2006年度か

らは200名以上の受講が認められる大人数講義に位置づけられて今日に至っています。

本学の自校史教育の特色は、総長講義実施のほかに、半期の講義を総説編と各説編に分けて、前者で通史的な授業を行った上で後者では特定のテーマごとに名大史を取り上げるというスタイルをとっている点にあります。さらに、この各説編の教材として使用される「名大史ブックレット」シリーズ(既刊12巻)は、受講生のみならず学外者からも好評を得ており、大学文書資料室ホームページ上で電子ブック版が公開されています。

また、今年度で4回目になった総長講義については、初回分からの授業記録が公表されており、特に2005年度分以降のものはDVDに録画されて本学附属図書館の視聴覚資料に登録されています。

なお、本学では1998~2000年度ならびに2007年度には、自校史教育のダイジェスト版である自校史講義が新規採用職員研修のプログラムに組み込まれています。



1	2
3	4

- 1 開講初年度(1999年度)の授業風景
- 2 2007年度の授業風景(平野総長による講義)
- 3 自校史教育の教材(名大史ブックレット)
- 4 総長講義の記録  
(2004年度は記録冊子、2005年度以降はDVD)